

Oracle® Data Relationship Management

Installation Guide

リリース 11.1.2.4

著作権情報

Oracle® Data Relationship Management Installation Guide, 11.1.2.4

Copyright © 1999, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複製、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アSEMBル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用の際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	5
ドキュメントのフィードバック	6
第1章. Data Relationship Managementのインストール	7
インストールの前提条件	7
アーキテクチャ・オプション	8
Oracle Databaseの前提条件	12
SQL Serverデータベースの前提条件	13
アジア系グリフのPDFフォントの要件	13
仮想メモリー・ページファイルのサイズ設定	13
その他の資料	14
ミドルウェア・ホームおよびEPM Oracleホームについて	14
Foundation Services	15
Data Relationship Management CSSブリッジ	15
Data Relationship ManagementおよびFoundation Servicesのデプロイメント・シナリオ	16
Data Relationship Managementのインストール	17
分散環境でのData Relationship Managementのインストール	18
セカンダリData Relationship Management Webサーバー・ホストのインストール	18
セカンダリFoundation Servicesホストのインストール	18
トラブルシューティング	19
第2章. Data Relationship Managementの構成	21
Data Relationship Management用のFoundation Servicesの構成	21
セカンダリFoundation Servicesホストの構成	22
外部プロバイダでのShared Servicesの構成	22
シングル・サインオン用のShared Servicesの構成	23
Data Relationship Management用のCSSモードの構成	23
Data Relationship Management構成コンソールの起動	23
Data Relationship Managementアプリケーションの構成	23
アプリケーションの作成	24
アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定	24
日付、時間および数値のフォーマット	24
リポジトリの作成	25
リポジトリのコピー	29
ホスト・コンピュータの構成	29
認証設定の構成	34
EPMレジストリ設定の構成	35
スケジュール済タスクの構成	36
アプリケーションの削除	37
構成設定の保存およびアプリケーション・サーバーのサービスの起動	37
WebブラウザでのData Relationship Managementの起動	37
Internet Explorerでの互換表示モードの無効化	38
移行ユーティリティの構成	38
アップロード・ファイル・サイズの増加	39
Data Relationship Management Webアプリケーションのロード・バランシング	40

WebサーバーでのSSLの停止	41
Data Relationship Managementでのシングル・サインオンの使用	41
Webアクセス管理	42
第3章. Data Relationship Management WebサービスAPIのデプロイおよび構成	43
システム要件	43
デプロイメントの前提条件	44
Foundation Servicesのインストールおよび構成	44
Oracle Web Services Manager用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール	44
Oracle Web Services Managerの構成	44
外部プロバイダでのWebLogicの構成	45
APIアダプタの構成	45
Webサービス・アプリケーションのデプロイ	45
Data Relationship Management Webサービスの保護	45
Oracle Web Services Managerでのポリシーの構成	46
SSL用のData Relationship Management APIアダプタの構成(オプション)	46
Oracle Enterprise Managerを使用したData Relationship Management Webサービスのテスト	47
Webサービス・アプリケーションのロギングの構成	49
トラブルシューティング	49
第4章. Data Relationship Managementインストールのアップグレード	51
アーキテクチャの比較	51
サポートされるアップグレード・パス	52
9.2.x、9.3.xおよび11.1.1.xのリポジトリ・アップグレード・パス	52
11.1.2.xのリポジトリ・アップグレード・パス	52
アップグレード・チェックリスト	53
既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード	54
データ分析	58
外部接続の使用	59
データ変換	60
アプリケーションへの更新の適用	63
手動アップグレード・タスク	64
派生プロパティ参照によるプロパティのアップグレード	64
バッチ・クライアント・スクリプトのアップグレード	64
APIプログラムのアップグレード	65
第5章. Data Relationship Managementアプリケーションのモニタリング	67

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracleのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracleサポート・サービスでは、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントへのフィードバックをお送りください: epmdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトでEPM情報開発をフォローできます:

LinkedIn - http://www.linkedin.com/groups?gid=3127051&goback=.gmp_3127051

Twitter - <http://twitter.com/hyperionepminfo>

Facebook - <http://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>

Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731/#106915048672979407731/posts>

YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>

1

Data Relationship Managementのインストール

この項の内容：

インストールの前提条件	7
その他の資料	14
ミドルウェア・ホームおよびEPM Oracleホームについて	14
Foundation Services	15
Data Relationship Managementのインストール	17
分散環境でのData Relationship Managementのインストール	18
トラブルシューティング	19

インストールの前提条件

チェックする項目：

- Oracle Data Relationship Managementは、管理者としてログインしているユーザーがインストールする必要があります。
- 目的のホスト・コンピュータが、最小システム要件以上を満たしています。



注：

動作保証されたバージョンのプラットフォーム・コンポーネントの詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusioncertification-100350.html>にあるOracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemの動作保証マトリックスを参照してください。

- インターネット接続のないマシンにのみMicrosoft .NET Framework 4.0および4.5が必須で前提条件となります。.NET Frameworkがインストールされず、インターネット接続がある場合、Data Relationship Managementインストーラがかわりにインストールします。
- データベース・サーバーがインストールされ、データベース・コンピュータ上で稼働しています。
- Internet Information Services (IIS)がインストールされ、Webサーバー上で稼働しています。
- 次のアクションを実行できるユーザー・アカウントがアプリケーション・サーバーで使用可能です：
 - レジストリ設定を編集
 - ローカル・ファイル・システムを対象とした読取りおよび書込み
 - プロセスを起動
 - サービスとして実行

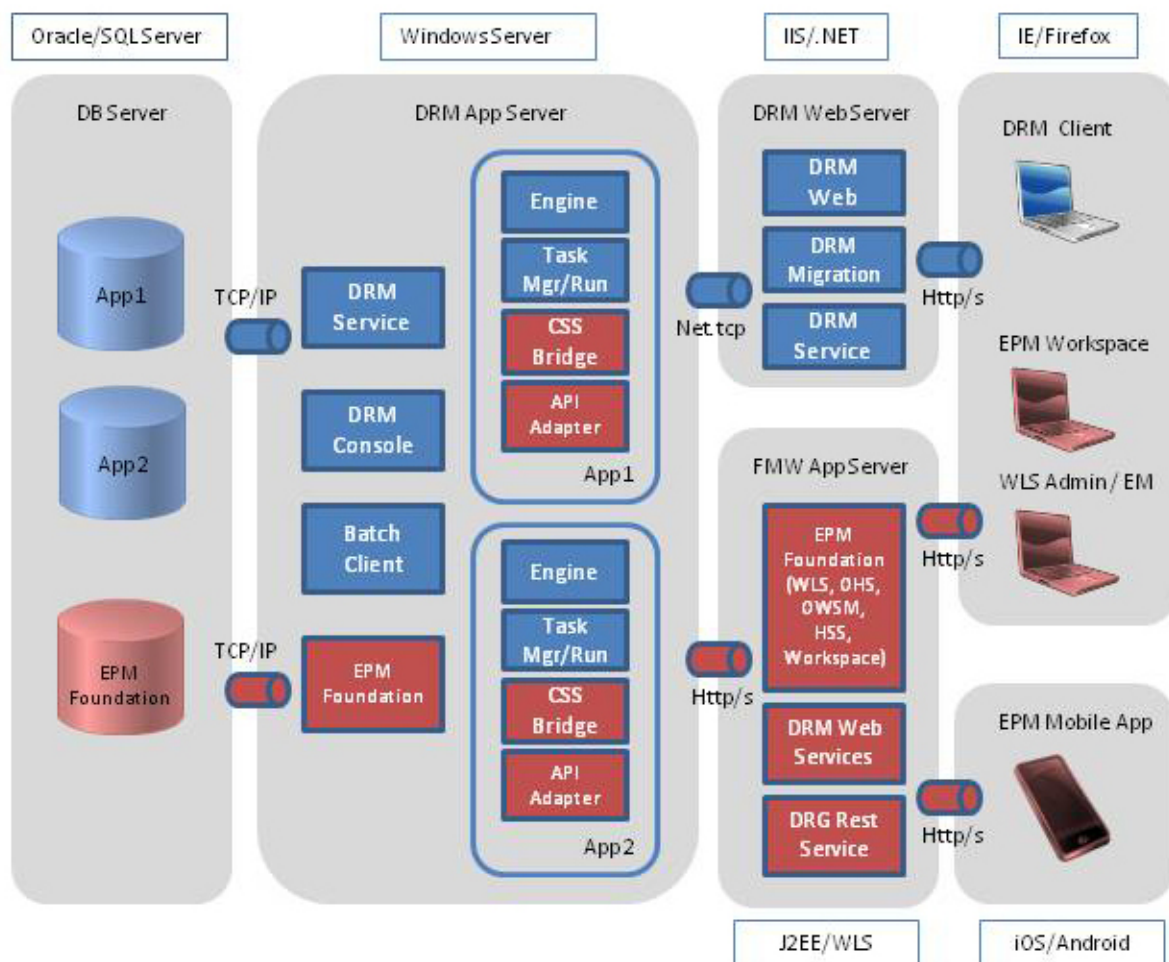
詳細は、次を参照してください：

- アーキテクチャ・オプション(8ページ)
- Oracle Databaseの前提条件(12ページ)
- SQL Serverデータベースの前提条件(13ページ)
- アジア系グリフのPDFフォントの要件(13ページ)
- 仮想メモリー・ページファイルのサイズ設定(13ページ)

アーキテクチャ・オプション

次の各図は、Data Relationship Managementの様々な構成シナリオを示しています。

図1 Data Relationship Managementのアーキテクチャ



注:

EPM FoundationをData Relationship ManagementでアクセスできるWindowsサーバーにインストールする必要があります。ローカルまたはFMWアプリケーション・サーバーで実行できます。

図2 Data Relationship Management標準アーキテクチャ

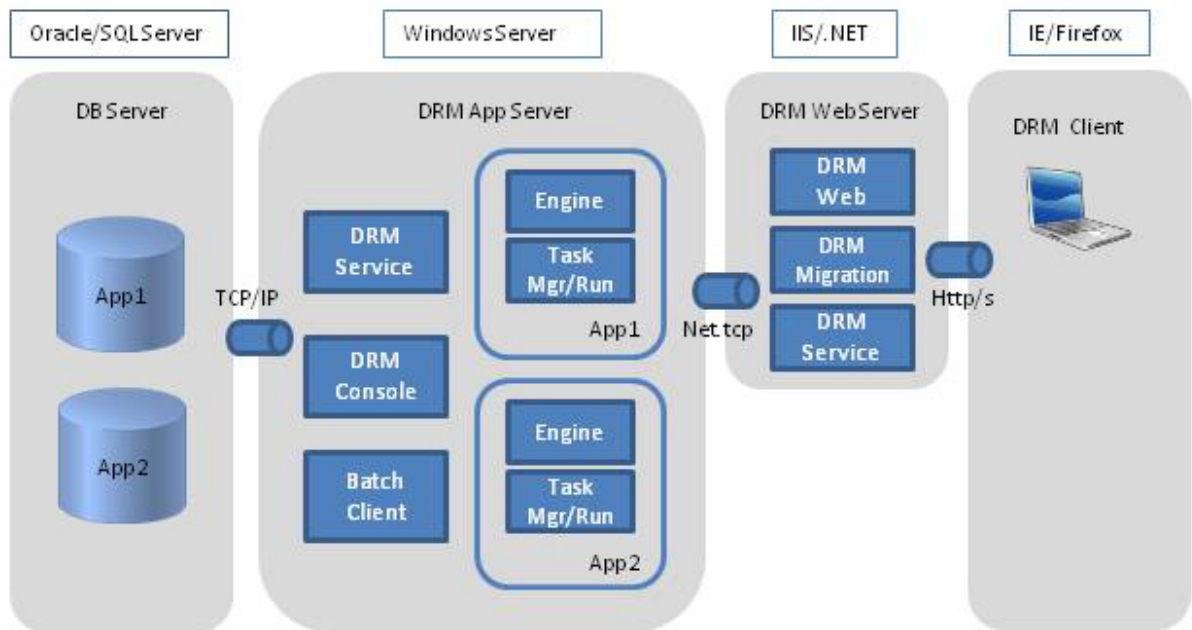


図3 EPM Foundationを使用したData Relationship Management

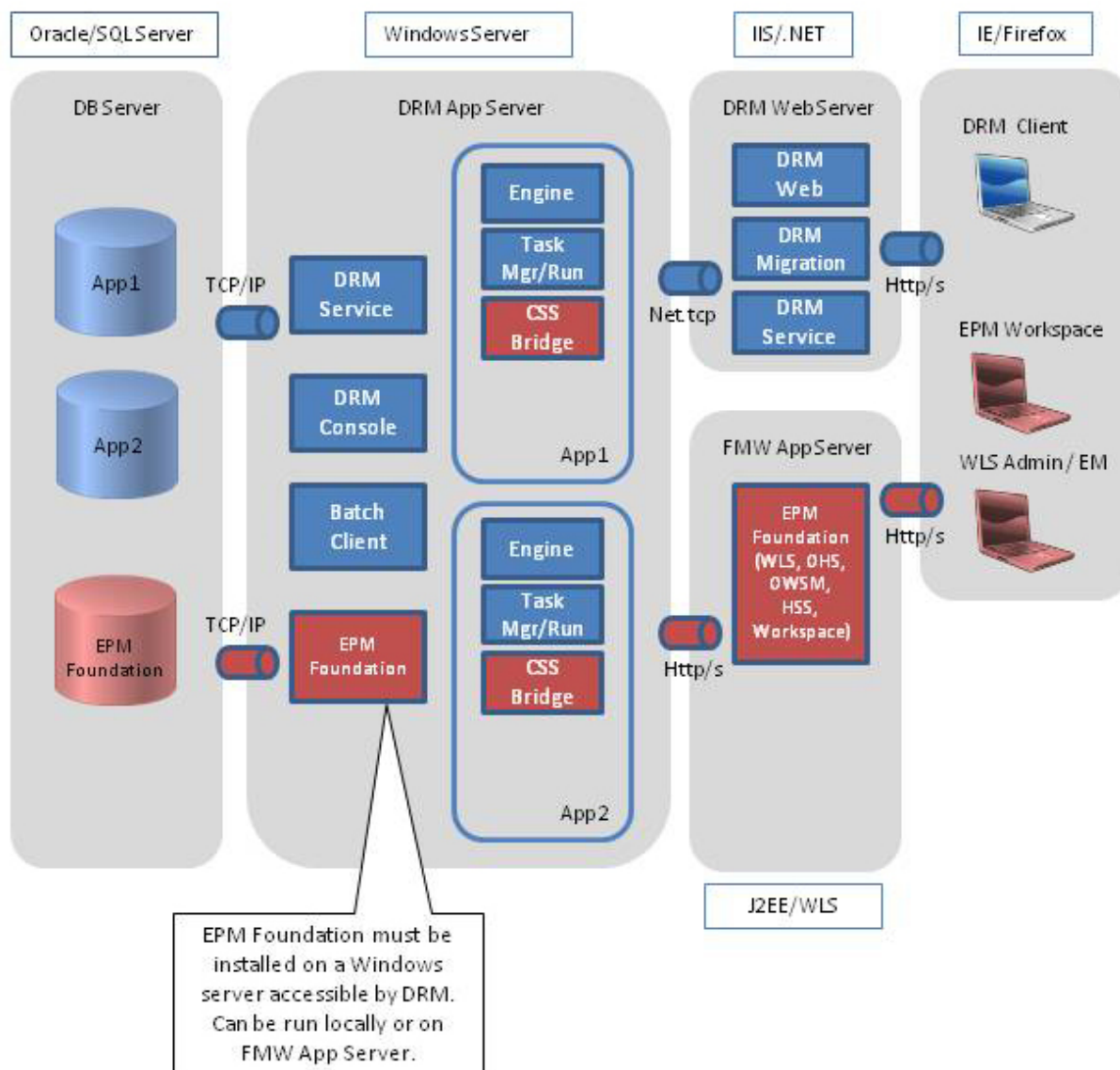


図4 API統合を使用したData Relationship Management

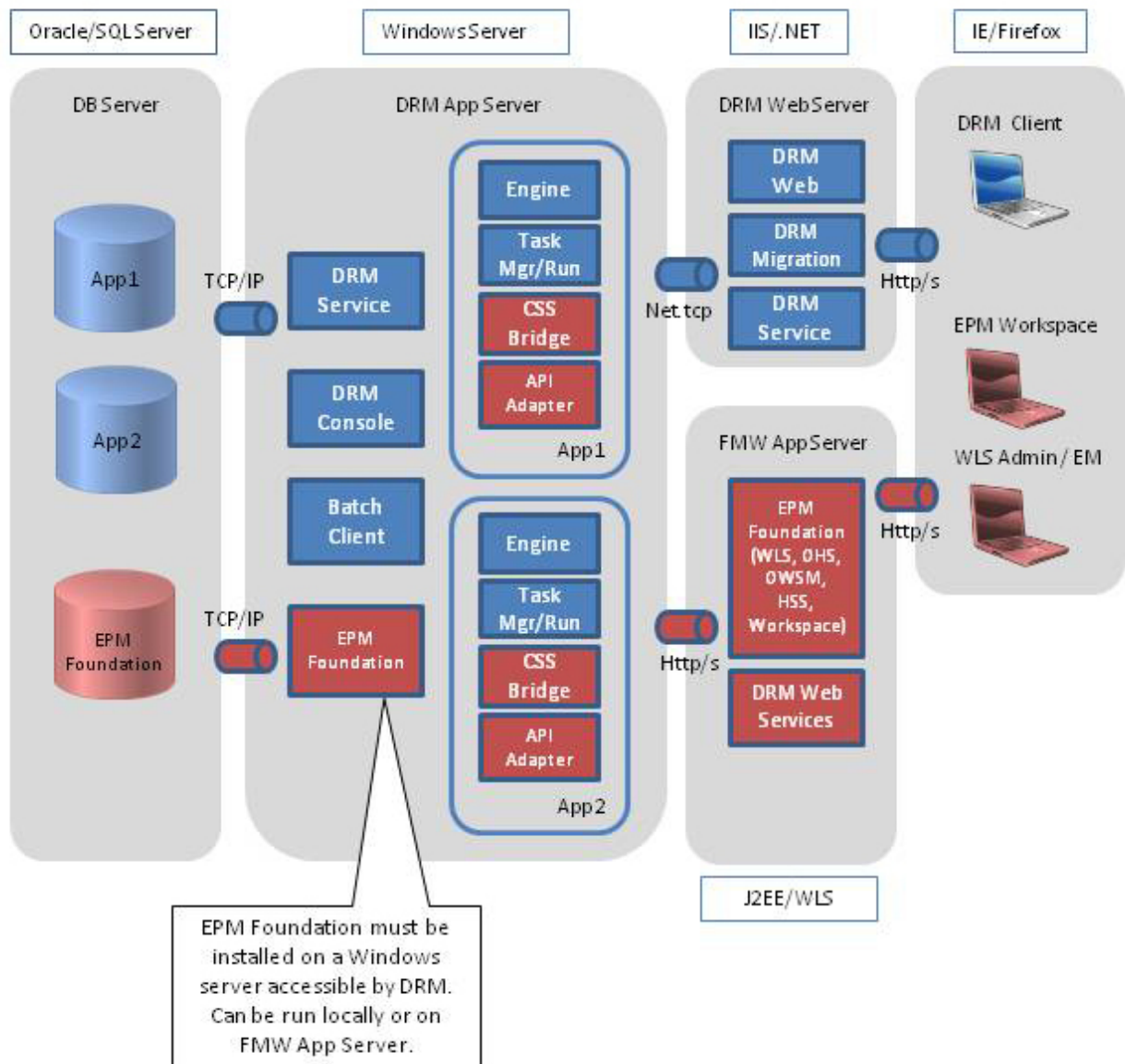
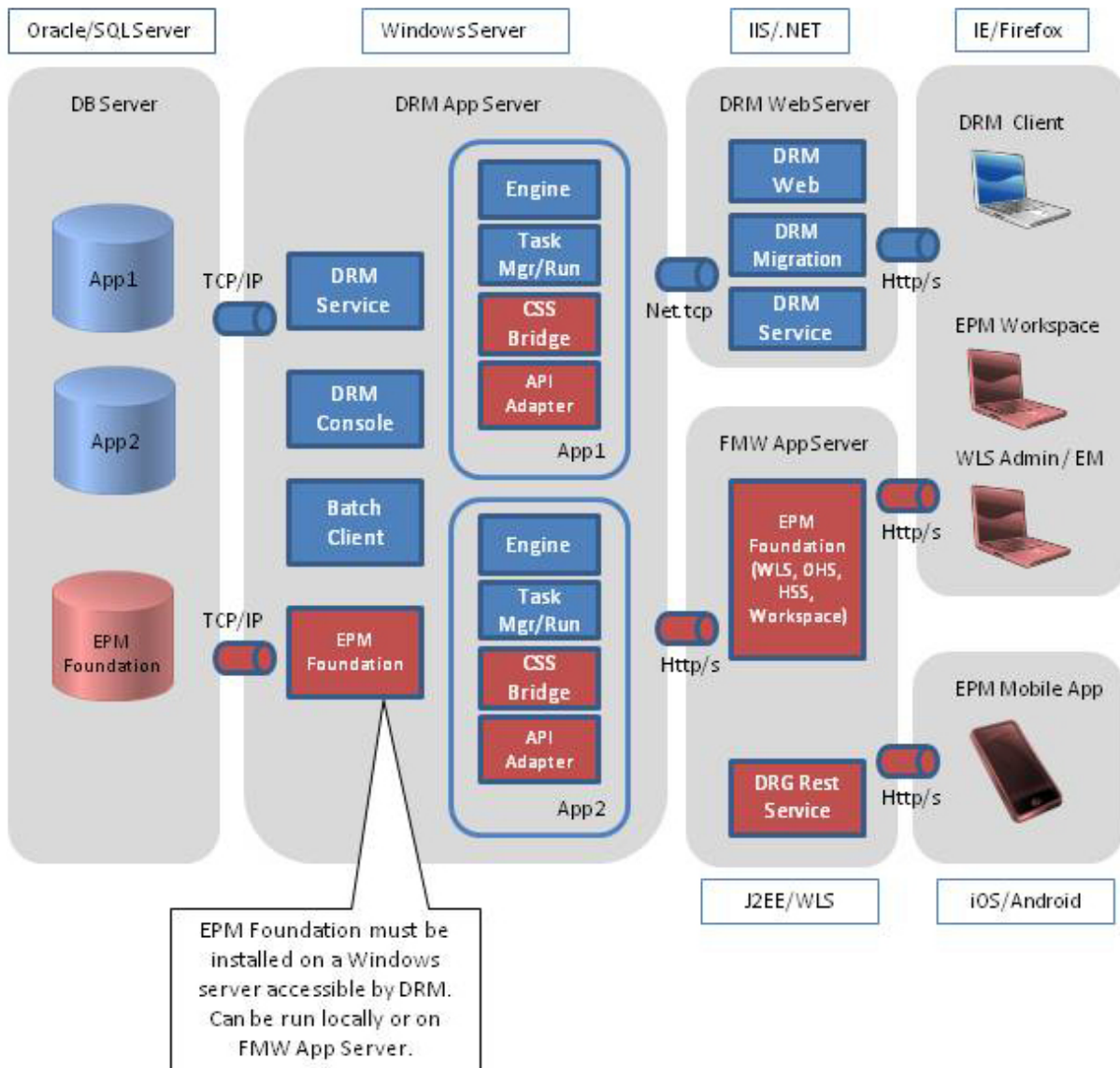


図5 EPM Mobileを使用したData Relationship Management



Oracle Databaseの前提条件

- Oracle RACデータベース・システムを使用している場合、インストールの前に、適切なRDBMSソフトウェアでテーブルスペースを作成する必要があります。
- スクリプトが自動または手動で実行されているかにかかわらず、DBA権限を持つユーザーがログインする必要があります。データベース・スクリプトを手動で実行すると、リポジトリ・ウィザードのData Relationship Managementデータベース接続で指定したユーザーIDが、RDBMSに作成されます(まだ存在していない場合)。ユーザーは、DRM_DATAのデフォルト・テーブルスペースに割り当てられますが、次のアイテムに対するアクセス権を持っている必要があります：
 - デフォルト・テーブルスペース(通常はDRM_DATA)
 - UNLIMITED TABLESPACE

- CONNECT
- CREATE ANY SEQUENCE
- CREATE USER
- ALTER USER
- データベース・スクリプトを手動で実行すると、ユーザーは、DRM_DATAのデフォルト・テーブルスペースを含むスキーマ所有者としてログインします。このユーザーは、次のアイテムに対するアクセス権を持っている必要があります:
 - デフォルト・テーブルスペース(通常はDRM_DATA) - テーブルスペースが作成されていない場合、これはインストール後に実行できます。
 - UNLIMITED TABLESPACE
 - DBA
 - CONNECT
 - CREATE ANY SEQUENCE
 - CREATE USER
 - ALTER USER



注:

スキーマ所有者の名前はインストール・プロセス中に変更できます。

SQL Serverデータベースの前提条件

- SQL Serverクラスタ・データベース・システムを使用している場合、インストールの前に、適切なRDBMSソフトウェアでデータベースを作成する必要があります。
- Data Relationship Managementデータベース接続に指定されているユーザーIDをインストールの前に手動で作成する場合、そのユーザーをData Relationship Managementデータベースのデータベース所有者にすることが重要です。

アジア系グリフのPDFフォントの要件

ダウンロードしたPDFファイルでアジア系グリフを表示可能にするには、Arial Unicode MSフォントをWebサーバーにインストールする必要があります。

仮想メモリー・ページファイルのサイズ設定

適切なパフォーマンスを確保するために、Data Relationship Managementサーバー上のWindowsページファイルのサイズは、システム・メモリーの増加を最大2倍まで許容できる状態で、システム・メモリーを少なくとも1.5倍にすることをお勧めします。64GBを超えるなど、システム・メモリーが大きい場合、ページファイルはシステム・メモリーの1.0

から1.5倍になる可能性があります。ページファイルのサイズが小さいと、パフォーマンスおよび機能に重大な問題が発生する可能性があります。

その他の資料

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemのインストール・ドキュメントは、Oracle Technology Networkの[Oracle Documentation Library](#)にあります。Data Relationship Managementをインストールして構成する場合、次のドキュメントが役立ちます：

- *Oracle Enterprise Performance Management System* インストール概要
- 『Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』
- *Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド
- *Oracle Enterprise Performance Management System* バックアップおよびリカバリ・ガイド
- *Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System* セキュリティ構成ガイド

ミドルウェア・ホームおよびEPM Oracleホームについて

ミドルウェア・ホーム

ミドルウェア・ホームは、Oracle WebLogic Serverホーム、および必要に応じて1つ以上のOracleホーム(EPM Oracleホームを含む)で構成されています。ミドルウェア・ホームは、ローカルのファイル・システム上またはネットワーク・ファイル・システム(NFS)を介してアクセス可能なリモートの共有ディスク上に設定できます。

ミドルウェア・ホームの場所は、コンピュータへの最初の製品インストール中に定義されます。コンピュータへのその後のインストールには、前に定義された場所が使用されます。デフォルトのインストール・ディレクトリはOracle/Middlewareです。ミドルウェア・ホームの場所は、このドキュメント全体を通してMIDDLEWARE_HOMEと呼ばれます。

EPM Oracleホーム

Oracleホームには、特定の製品をホストするのに必要なインストール・ファイルが含まれます。Oracleホームは、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。EPM OracleホームにはEPM System製品用のファイルが含まれています。

EPM System製品のコンポーネントは、ミドルウェア・ホーム下のEPM Oracleホームにインストールされます。デフォルトのEPM Oracleホームの場所はMIDDLEWARE_HOME/EPMSysystem11R1です。さらに、製品が使用する共通内部コンポーネントがEPM Oracleホームにインストールされます。マシン上にインストールするすべての製品に対して十分なディスク・スペースがこの場所にあることを確認し、慎重に場所を選択します。この場所は変更できません。

EPM Oracleホームの場所はEPM_ORACLE_HOMEというシステム環境変数で定義されています。このドキュメント全体を通して、EPM Oracleホームの場所をEPM_ORACLE_HOMEと呼びます。

Foundation Services

次のオプション機能を使用する場合、Data Relationship Managementでは、Oracle Hyperion Foundation Servicesをインストールする必要があります:

- LDAPなどの外部ユーザー・ディレクトリでのユーザー認証
- Data Relationship Management Webアプリケーションのロード・バランシング
- Data Relationship Managementでのシングル・サインオンの使用
- E-Business SuiteおよびFusion Accounting Hub用のOracle General Ledgerとの統合
- Oracle Hyperion EPM Architectとの統合
- Data Relationship Management Webサービスを使用したAPIプログラムおよびSOAベースのプロセス
- Oracle Data Relationship Governance Mobileクライアントは、Oracle Data Relationship Governance REST Webサービスおよび外部認証を使用します

Foundation Servicesのインストールには、Data Relationship Management用にこれらの機能を構成して有効化できる次のコンポーネントが含まれます:

- Oracle WebLogic Server
- Oracle HTTP Server
- Oracle Web Services Manager
- Oracle Hyperion Shared Services

Foundation Servicesは、EPM Systemインストーラを使用してインストールされます。Foundation Servicesのインストールおよび構成プロセスは、*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成ガイドに記載されています。

詳細は、[Data Relationship Management CSSブリッジ\(15ページ\)](#)および[Data Relationship ManagementおよびFoundation Servicesのデプロイメント・シナリオ\(16ページ\)](#)を参照してください。

Data Relationship Management CSSブリッジ

Data Relationship Management CSSブリッジは、Shared Servicesと通信するために使用し、Foundation ServicesをData Relationship Managementとともに使用する場合にインストールする必要があります。次の情報および要件は、Data Relationship Management CSSブリッジを理解するために重要です。

- CSSブリッジ・ホスト・システムにData Relationship Managementアプリケーション・サーバーまたは別のサポートされているMicrosoft Windowsシステムを指定できます。



注:

CSSブリッジ・コンポーネントはUnix/Linuxシステムでサポートされていません。

- 指定されたCSSブリッジ・ホストがData Relationship Managementアプリケーション・サーバーでない場合、CSSブリッジ・コンポーネントをCSSブリッジ・ホストにインストールする必要があります。このシナリオで、CSSブリッジをスタンドアロン・コンポーネントとしてインストールできます。

- CSSブリッジがインストールおよび実行されるWindowsシステムにFoundation Servicesをインストールしてデプロイする必要があります。

CSSブリッジ・デプロイメント・オプションは、[Data Relationship Management](#)および[Foundation Services](#)のデプロイメント・シナリオ(16ページ)を参照してください。

Data Relationship ManagementおよびFoundation Servicesのデプロイメント・シナリオ

Foundation Servicesを使用したData Relationship Managementの詳細は、[10ページの図3](#)を参照してください。[セカンダリFoundation Servicesホストの構成\(22ページ\)](#)を参照してください。



注:

特に記載のないかぎり、システムはすべてMicrosoft Windowsです。

表1 Data Relationship ManagementおよびFoundation Servicesのデプロイメント・シナリオ

シナリオ	システム1	システム2	システム3
1	<ul style="list-style-type: none"> • Windows Data Relationship Management アプリケーション・サーバー • Windowsプライマリ Foundation Servicesインスタンス • Windows Data Relationship Management CSSブリッジ 	N/A	N/A
2	Windows Data Relationship Managementアプリケーション・サーバー	<ul style="list-style-type: none"> • Windowsプライマリ Foundation Servicesインスタンス • Windows Data Relationship Management CSSブリッジ 	N/A
3	<ul style="list-style-type: none"> • Windows Data Relationship Management アプリケーション・サーバー • Windowsセカンダリ Foundation Servicesインスタンス • Windows Data Relationship Management CSSブリッジ 	Windowsプライマリ Foundation Servicesインスタンス	N/A

シナリオ	システム1	システム2	システム3
4	<ul style="list-style-type: none"> Windows Data Relationship Management アプリケーション・サーバー Windowsセカンダリ Foundation Services インスタンス Windows Data Relationship Management CSSブリッジ 	Unix/Linuxプライマリ Foundation Services インスタンス	N/A
5	Windows Data Relationship Management アプリケーション・サーバー	Unix/Linuxプライマリ Foundation Services インスタンス	<ul style="list-style-type: none"> Windowsセカンダリ Foundation Services インスタンス Windows Data Relationship Management CSSブリッジ

Data Relationship Managementのインストール

Data Relationship Managementをインストールする前に、[8ページの図1](#)を確認してください。

▶ Data Relationship Managementをインストールするには:

1. インストール・プログラムをダウンロードしたディレクトリに移動し、`setup.exe`をダブルクリックします。
2. インストールの言語を選択して「OK」をクリックします。
3. まだMicrosoft .NET Framework 4.5をインストールしていない場合は、「インストール」をクリックしてインストールします。



注:

.NETのインストールを実行するには、インターネットに接続している必要があります。

4. 「ようこそ」ダイアログ・ボックスで、ライセンス契約を確認して「次」をクリックします。
5. 「次」をクリックしてData Relationship Managementファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、「変更」をクリックしてインストールの場所を選択し、「次」をクリックします。
6. 「設定タイプ」ダイアログ・ボックスで、実行するインストールのタイプを選択して、「次」をクリックします:
 - 完全 - アプリケーション・サーバー、CSSブリッジ、Webサーバー、移行ユーティリティ、バッチ・クライアントおよびドキュメントをインストールします。
 - カスタム - インストールするコンポーネントを選択できます。次のコンポーネントから選択できます:
 - DRMアプリケーション・サーバー—コア・エンジンおよびサーバー・ファイル
 - DRM CSSブリッジ—Shared ServicesのData Relationship Managementコネクタ
 - DRM Webサーバー—Data Relationship ManagementユーザーのプライマリWebアプリケーション
 - DRM移行ユーティリティ—アプリケーション・テンプレートを管理するWebアプリケーション

- DRMドキュメント—オンライン・ドキュメントにリンクします
- DRMバッチ・クライアント—バッチ操作を実行するWindowsコンソール・クライアント

7. 次のいずれかの操作を行います:

- 「完全」を選択した場合、次の手順にスキップします。
- 「カスタム」を選択した場合、「カスタム設定」ダイアログ・ボックスでインストールする機能を選択し、「次へ」をクリックします。



注:

デフォルトですべての機能が選択されます。インストールしない機能を選択解除します。

8. 「インストール」をクリックします。
9. 「終了」をクリックします。



注:

Data Relationship Managementアプリケーションを作成して構成するには、オプションを選択してData Relationship Management構成コンソールを起動します。

分散環境でのData Relationship Managementのインストール

次の項を参照してください:

- [セカンダリData Relationship Management Webサーバー・ホストのインストール\(18ページ\)](#)
- [セカンダリFoundation Servicesホストのインストール\(18ページ\)](#)

セカンダリData Relationship Management Webサーバー・ホストのインストール

セカンダリData Relationship Management Webサーバー・コンピュータをインストールするには、セカンダリ・コンピュータにData Relationship Management Webサーバー・コンポーネントをインストールします。[Data Relationship Management用のFoundation Servicesの構成\(21ページ\)](#)を参照してください。

セカンダリFoundation Servicesホストのインストール

EPM Systemインストーラを使用して、セカンダリFoundation Servicesインスタンスに次のFoundation Servicesコンポーネントをインストールする必要があります。

- Foundation Services Webアプリケーション

- 静的コンテンツ・ファイル
- WebLogicアプリケーション・サーバー

トラブルシューティング

インストールのトラブルシューティングの詳細は、『*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

2

Data Relationship Managementの構成

この項の内容：

Data Relationship Management用のFoundation Servicesの構成	21
Data Relationship Management構成コンソールの起動	23
Data Relationship Managementアプリケーションの構成	23
構成設定の保存およびアプリケーション・サーバーのサービスの起動	37
WebブラウザでのData Relationship Managementの起動	37
移行ユーティリティの構成	38
Data Relationship Management Webアプリケーションのロード・バランシング	40
WebサーバーでのSSLの停止	41
Data Relationship Managementでのシングル・サインオンの使用	41

Data Relationship Management構成コンソールは、アプリケーション・サーバー構成ユーティリティで、アプリケーション・サーバー・コンポーネントをインストールすると自動的にインストールされます。インストール・プログラムの最後にコンソールを開くことができます。



注：

すべてのData Relationship Managementサーバーおよび関連サーバーを構成して、ネットワークの共通のタイム・ソースにアクティブに同期する必要があります。非同期サーバーにより、パッケージ化された統合および他のData Relationship Management API使用に対してWebサービスが失敗します。また、パートナ・システムを使用したData Relationship Managementのデプロイメントと操作の複雑さが増します。



注意

すべてのData Relationship Managementサーバーおよび関連サーバーを構成して、各サーバーで同じパスの同じキーストアを使用する必要があります。

Data Relationship Management用のFoundation Servicesの構成

Foundation Servicesのインストールには、Data Relationship Managementで使用する前にEPMコンフィグレータ・ツールを使用してデプロイおよび構成する必要がある複数のコンポーネントが含まれます。

コンポーネントの構成順序の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』の構成順序に関する項を参照してください。Foundation Servicesコンポーネントの構成の実行手順は、EPM System製品の構成に関する項を参照してください。

詳細は、次を参照してください:

- [セカンダリFoundation Servicesホストの構成\(22ページ\)](#)
- [外部プロバイダでのShared Servicesの構成\(22ページ\)](#)
- [シングル・サインオン用のShared Servicesの構成\(23ページ\)](#)
- [Data Relationship Management用のCSSモードの構成\(23ページ\)](#)

セカンダリFoundation Servicesホストの構成

- Data Relationship Managementサービスがアプリケーション・サーバーで起動する前に、Windows Data Relationship ManagementサービスがCSSブリッジ・ホスト・コンピュータで起動して実行中である必要があります。
- CSSブリッジでセカンダリFoundation Servicesインスタンスを使用する場合:
 - EPM Systemコンフィグレータを使用して、セカンダリFoundation Servicesインスタンスで次のFoundation Servicesコンポーネントを構成する必要があります:
 - 共通設定の構成
 - Oracle Configuration Managerの構成
 - データベースの構成
 - アプリケーション・サーバーへのデプロイ
 - 「構成を適用するEPM Oracleインスタンスを選択してください」という構成では、「EPM Oracleインスタンスのホーム・ディレクトリ」にはデフォルトまたはカスタムのパスを使用し、「EPM Oracleインスタンス名」にはデフォルトを使用します。
 - 「インスタンス・ホームに関連付けられたShared Servicesおよびレジストリ・データベース接続を設定します」という構成では、「前に構成されたShared Servicesデータベースに接続」オプションを選択し、プライマリFoundation Servicesインスタンスに構成されているデータベースの接続情報を指定します。
 - 「アプリケーション・サーバーへのデプロイ - WebLogicドメイン情報を指定してください」という構成では、「Webアプリケーションを新規ドメインにデプロイしてください。」というオプションを選択します。
 - インストールおよび構成後に、セカンダリ・コンピュータでEPM Webアプリケーション・サーバーを起動または実行する必要はありません。

[Data Relationship ManagementCSSブリッジ\(10ページ\)](#)を参照してください。

外部プロバイダでのShared Servicesの構成

Shared Servicesを構成するには、Oracle Enterprise Performance Management Systemユーザー・セキュリティ管理ガイドのOID、Active Directoryおよびその他のLDAPベースのユーザー・ディレクトリの構成に関する項を参照してください。

開発目的でShared Servicesを構成し、外部ディレクトリとしてWebLogic埋込みLDAPサーバーを使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-foundation/resource-library-090986.html>に移動して「**EPM System Tips & Tricks 1-72 (PDF)**」を選択してください。このドキュメントで、WebLogic埋込みLDAPサーバーをEPM System 11.1.2製品の外部ディレクトリとして使用できるかどうかに関する項を参照してください。

シングル・サインオン用のShared Servicesの構成

Oracle Enterprise Performance Management Systemセキュリティ構成ガイドのSSO用のEPM Systemの構成に関する項を参照してください。

Data Relationship Management用のCSSモードの構成

Shared Servicesを使用してユーザーを認証するために、CSS認証モードまたは混合モードでData Relationship Managementサーバーを構成する必要があります。[32ページのCSSブリッジの構成](#)および[34ページの認証設定の構成](#)を参照してください。

Data Relationship Management構成コンソールの起動

Data Relationship Management構成コンソールを起動するには、「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。

Data Relationship Managementアプリケーションの構成

Data Relationship Managementでは、アプリケーションを使用してデータを管理し、データにアクセスするためのユーザー・リクエストを提供します。単一のマシン上で1つ以上のData Relationship Managementアプリケーションを実行できます。各アプリケーションおよびリポジトリは、Data Relationship Managementアプリケーション・サーバーの1つのアクティブ・インスタンスによってのみアクセスできます。

複数のData Relationship Managementアプリケーションを構成する前に、[9ページの図2](#)を確認してください。

次の項を参照してください:

- [アプリケーションの作成\(24ページ\)](#)
- [アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定\(24ページ\)](#)
- [日付、時間および数値のフォーマット\(24ページ\)](#)
- [リポジトリの作成\(25ページ\)](#)
- [リポジトリのコピー\(29ページ\)](#)
- [ホスト・コンピュータの構成\(29ページ\)](#)
- [認証設定の構成\(34ページ\)](#)
- [EPMレジストリ設定の構成\(35ページ\)](#)
- [スケジュール済タスクの構成\(36ページ\)](#)
- [アプリケーションの削除\(37ページ\)](#)

アプリケーションの作成

Data Relationship Managementアプリケーションは、構成コンソールで作成します。少なくとも1つのアプリケーションを作成する必要があります。

▶ Data Relationship Managementアプリケーションを作成するには:

1. Data Relationship Management構成コンソールで、「追加」をクリックして新規アプリケーションを作成します。
2. 「構成」タブで、リポジトリを構成します。



注:

リポジトリを作成していないか、リポジトリをアップグレードする必要がある場合、リポジトリ・ウィザードを使用する必要があります。[25ページのリポジトリの作成](#)を参照してください。

3. 「構成の保存」をクリックします。
4. 「ローカル・サービス」メニューから、「開始」をクリックしてData Relationship Managementサービスを開始します。

新規アプリケーションを追加する場合、アプリケーションは標準のデフォルト・パラメータで作成されます。デフォルト・アプリケーション名は、コンピュータ名から生成されます。

アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定

Data Relationship Managementアプリケーションごとに使用するデフォルト・カルチャを設定できます。設定をWebブラウザから決定できない場合、デフォルト・カルチャがWebクライアントのローカライズに使用されます。

▶ アプリケーションのデフォルト・カルチャを設定するには:

1. Data Relationship Management構成コンソールで、アプリケーションを選択します。
2. 「デフォルト・カルチャ」からオプションを選択します:

- en-US - 英語
- fr-FR - フランス語
- de-DE - ドイツ語
- ja-JP - 日本語
- ko-KR - 韓国語
- zh-CHS - 簡体字中国語

日付、時間および数値のフォーマット

Data Relationship Managementユーザー・インタフェースにおける日付、時間および数値のプロパティ・データ値のフォーマットは、次の2つの要因によって決まります:

- Data Relationship Managementクライアント・コンピュータのブラウザの言語設定
- Data Relationship Managementアプリケーション・サーバー・コンピュータ上のData Relationship Managementサービス・ログオン・アカウントに定義された地域のオプション設定。

Data Relationship Management Webクライアントのセッション情報には、ブラウザの言語設定に定義されたユーザーのカルチャが含まれます。クライアントに表示される、要求されたカルチャのデータ値のフォーマットは、対応するカルチャのフォーマットが、DRMサービス・ログオン・アカウントの地域のオプション用に、Data Relationship Managementサーバー上でどのように定義されているかによって決まります。クライアントのオペレーティング・システムの地域のオプション設定は、ユーザー・インタフェースにおけるデータ・フォーマットに影響しません。

同様に、Data Relationship Managementバッチ・クライアント・パラメータ「/CultureName」では、ブラウザの言語を介してカルチャのフォーマットを指定できます。また、Webクライアントと同様に、データ値のフォーマットは、対応するカルチャがData Relationship Managementサービス・ログオン・アカウント用に、Data Relationship Managementサーバー上でどのように定義されているかによって決まります。

例 - Data Relationship Management Webクライアントのブラウザの言語が「en-US」に設定されているとします。Data Relationship ManagementサーバーにData Relationship Managementサービス・ログオン・アカウントとしてログインすると、対応する地域のオプションのカルチャ「English (United States)」の短い日付フォーマットは「MM/dd/yyyy」です。Data Relationship Managementクライアント・ユーザー・インタフェースにおける日付は、「MM/dd/yyyy」のフォーマットで表示されます。



注:

Data Relationship Managementサーバー・プロセス・サービスのデフォルトのログオン・アカウントは、「ローカル・システム」です。Data Relationship Managementで使用される地域のオプションを表示またはカスタマイズするには、Data Relationship Managementサービス・ログオン・アカウントを「ローカル・システム」からローカルの「管理者」アカウントに変更する必要があります。これにより、サービス・アカウントと同じサーバーにログオンし、Data Relationship Managementサービスで使用される地域のオプションを表示または変更することができます。

リポジトリの作成

構成コンソールのリポジトリ・ウィザードでは、新規リポジトリを作成するか、リポジトリをアップグレードできます。アップグレードの詳細は、[54ページの既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード](#)を参照してください。



注意

各Data Relationship Managementアプリケーションには固有のリポジトリが必要です。同じリポジトリを使用するために2つのアプリケーションを構成しないでください。

▶ 新規リポジトリを作成するには:

1. 「リポジトリ・ウィザード」ボタンをクリックします。
2. 「新規リポジトリの作成」を選択します。
 - オプション: 「既存のリポジトリに基づいたサイズの推定」を選択すると、既存のリポジトリのサイズに基づいて新規リポジトリを作成できます。

- オプション: 「SQLスクリプトの生成」を選択すると、データベース作成スクリプトを作成してダウンロードし、後から実行できます。
3. 「次」をクリックします。
 4. 次のいずれかの操作を行います:
 - スクリプトを生成する場合、[28ページのSQLスクリプトの生成](#)に移動してください。
 - 前の手順で他のオプションを選択した場合、次の手順に進んでください。
 5. 次を実行します:
 - データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
 - 新規リポジトリを配置するターゲット・データベースへの接続を入力します。
 - データベース・スキーマおよびデータ・ファイルを作成する権限を持つ管理者のユーザーIDおよびパスワードを入力します。



注:

SQL Serverの場合、SQLアカウントのみがサポートされます。

- オプション: 「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は60秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラーを生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は900秒です。



注:

タイムアウト値をゼロに設定すると、タイムアウトは使用されません。これらの設定は`drm-config.xml`に保存され、エンジンによって起動時に使用されます。大規模操作(大規模なバージョンの削除など)を実行するには、「コマンドのタイムアウト」をデフォルトより大きい値に設定します。

- 「接続のテスト」をクリックします。
6. 「次」をクリックします。
 7. 次のいずれかの操作を行います:
 - Oracle Databaseの場合、次の手順に進んでください。
 - SQL Serverデータベースの場合、[27ページのSQL Serverデータベースの作成](#)に進んでください。
 8. Data Relationship Managementリポジトリのスキーマ所有者として作成されるユーザーのIDおよびパスワードを入力します。
 9. デフォルト・テーブルスペース設定を受け入れるか、変更を加えて「次」をクリックします。



注:

データ、インデックス、トランザクションおよびプロパティには専用のテーブルスペースを使用することを強くお勧めします。デフォルト・テーブルスペースの名前は、すでに使用中である可能性があり、新しいテーブルスペースの名前を指定しない場合は再利用されます。

10. 「アプリケーション管理者の作成」ページで、管理者ユーザーのパスワードを入力して「次」をクリックします。
11. 「リポジトリ確認の作成」ページで、設定を確認して「次」をクリックし、作成プロセスを開始します。

データベースが作成されると、成功メッセージが表示されます。

12. 「次」をクリックします。



ヒント:

リポジトリの作成、コピーおよびアップグレードの情報は、リポジトリ・ウィザードのログに書き込まれます。ウィザードの「リポジトリの操作の完了」ページの「ログの保存」をクリックし、ログ・ファイルを保存します。

13. 「リポジトリの操作の完了」画面で、「終了」をクリックします。

設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。



注:

メニュー・バーからリポジトリ・ウィザードを起動した場合、「終了」によってウィザードの最初のページに戻ります。「アプリケーション」タブのボタンからウィザードを起動した場合、「終了」をクリックすると選択したアプリケーションに設定が適用されます。「取消し」をクリックしてもリポジトリは作成されますが、設定はどのアプリケーションにも適用されません。構成を保存すると新規データベースが適用されます。

14. 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

SQL Serverデータベースの作成

- ▶ Data Relationship Managementリポジトリ用のSQL Serverデータベースを構成する方法:

1. Data Relationship Managementデータベースのログインとして作成されるユーザーのIDおよびパスワードを入力します。



注意

データベース・ユーザーの名前またはパスワードを作成する場合、アットマーク(@)、スラッシュ(/)、カンマ(,)およびコロン(:)の各記号は使用できません。

2. Data Relationship Managementリポジトリを保持するために作成するデータベースの名前を入力します。



注意

データベース名を数字で始めることはできません。

3. 次のいずれかを実行して「次」をクリックします:

- 「データ・ファイルにサーバーのデフォルトを使用する」を選択すると、データベースとログ・ファイルのパスおよびサイズとしてデフォルト設定が使用されます。

- データ・ファイルとログ・ファイルのパスおよびサイズを入力します。
4. 「アプリケーション管理者の作成」ページで、管理者ユーザーのユーザー名とパスワードを入力し、「次」をクリックします。
 5. 構成の作成ページで、ターゲット・リポジトリ情報を確認し、「次」をクリックします。



注:

リポジトリが作成されたら、ログを保存できます。

6. 次のいずれかの操作を行います:
 - 「終了」をクリックして現在のアプリケーションに変更を適用します。
設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。
 - 「取消し」をクリックしてウィザードを終了します。
7. 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

SQLスクリプトの生成

手動でリポジトリを作成できるSQLスクリプトを生成できます。スクリプトを保存する場合、リポジトリ接続情報を指定する必要はありません。

▶ SQLスクリプトを生成するには:

1. 「リポジトリ・ウィザード」をクリックします。
2. 「SQLスクリプトの生成」を選択して、「次」をクリックします。
3. 「Oracle」または「SQL Server」タブを選択してリポジトリ情報を入力します。
4. 「次」をクリックします。
5. 「リポジトリ作成スクリプト」画面で、「ファイルに保存」をクリックし、ファイルを保存するフォルダに移動します。



注:

OracleおよびSQL Serverデータベースのファイル名は、両方ともdrm-create-database.sqlです。

6. 「次」をクリックします。
7. 「リポジトリ・オブジェクト作成スクリプト」画面で、「ファイルに保存」をクリックし、drm-create-schema-objects.sqlファイルを保存するフォルダに移動します。
8. 「次」をクリックします。
9. 「終了」をクリックします。

データベース・スクリプトの手動による実行

ローカル・セキュリティの手順に基づいて、新規データベースを作成する場合、Data Relationship Managementをインストールするユーザーに使用できないアクセス・レベルが必要になることがあります。そのため、インストール中に、データベース・スクリプトを自動的に実行せずにディスクに保存するオプションがあります。その後、適切なデータベース管理者が個別にスクリプトを実行できます。

▶ 手動でスクリプトを実行するには:

1. データベース管理者権限を持つユーザーとしてデータベース・サーバーにログインします。
2. 次の順序でスクリプトを実行します:
 - `drm-create-database.sql`
 - `drm-create-schema-objects.sql`
3. すべてのスクリプトが正常に実行された後、Data Relationship Management構成コンソールを開きます。
4. 「追加」をクリックします。
5. 「リポジトリ構成」タブで、サービス接続情報を入力し、「構成の保存」をクリックします。



注:

「接続のテスト」をクリックして、接続を確認できます。

これで、Data Relationship Managementリポジトリの手動による作成が完了しました。

6. 「アプリケーション」リストからアプリケーションを選択します。

データベースは、アプリケーションの最初の起動時に自動的に初期化されます。

リポジトリのコピー

構成コンソールのリポジトリ・ウィザードでは、現在のリリースのリポジトリを、同一または異なるデータベース・プロバイダ上で実行されている別のリポジトリにコピーできます。

- コピー・パスのオプション1:

「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。



注:

現在のリリースのリポジトリの異なるコピー方法に関する重要な情報は、リポジトリ・ウィザードの「ソース接続」ページにある説明を参照してください。

- コピー・パスのオプション2:

1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成SQLスクリプトを手動で実行します。
2. ターゲット接続として手順1で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。

ホスト・コンピュータの構成

Data Relationship Managementサーバー・コンポーネントは、1つ以上のホスト・コンピュータで実行できます。構成コンソールを使用すると、各サーバー・コンポーネントにホスト・コンピュータを構成できます。構成の詳細は、適切なホスト・コンピュータの項を参照してください:

- エンジン・ホストの構成(30ページ)
- APIアダプタの構成(30ページ)
- Webサーバーの構成(30ページ)
- CSSブリッジの構成(32ページ)
- SMTPサーバーの構成(34ページ)

エンジン・ホストの構成

▶ エンジン・ホスト・コンピュータを構成するには:

1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」を選択し、「エンジン」タブでコンピュータ名とポート番号を入力します。
2. 「エンジン起動のタイムアウト」には、Data Relationship Managementエンジン・プロセスの起動時に待機する秒数を入力します。



注:

エンジンがこの秒数以内に応答しない場合、Windowsイベント・ログにエラーが記録されます。

APIアダプタの構成

APIアダプタ・コンポーネントは、Data Relationship Managementアプリケーション・サーバー・インストール・コンポーネントに付属します。



注:

WebサービスAPIを使用してData Relationship Managementにアクセスする場合にAPIアダプタを有効にします。

▶ APIアダプタ・ホストを有効にするには:

1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」、「APIアダプタ」の順に選択します。
2. 次を実行します:
 - 「APIアダプタの使用可能」を選択します。
 - ホストのポート番号を入力します。
 - SSL証明書の名前を入力します。
3. 「テストURL」リンクをクリックして、リンクが有効であることを確認します。

Webサーバーの構成

「UI Webサーバー」タブで、Data Relationship Management Webクライアント・アプリケーションを実行するために構成されているサーバーをリストします。

このタブでは、次の操作も可能です:

- 「Webファーム」タブで、ノードURLを計算するための追加のWebサーバー属性を構成します。
- 「匿名プロファイル」タブで、ユーザーがログインせずにカスタムURLを通じてWebクライアントにアクセスできるようにする匿名プロファイルを設定します。

▶ Webサーバーを構成するには:

1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」、「UI Webサーバー」の順に選択します。
2. 「ホスト・サーバー」タブで、Data Relationship Management Webクライアント・アプリケーションを実行するために構成されているサーバーの名前を入力します。



注意

ユーザーがData Relationship ManagementにログインしたときにData Relationship Management Webクライアントのアプリケーション・リストにアプリケーションを表示するためには、コンピュータ名をここにリストする必要があります。

3. 「Webファーム」タブで、次の手順を実行します:

- a. 「ホスト名」に、すべての計算済ノードURLで使用するコンピュータ名を入力します。
- b. ホストのポート番号を入力します。



注:

デフォルトは80です。

- c. 「パス」に、Data Relationship Managementログオン・ページのディレクトリ・アプリケーション・パスを入力します。



注:

デフォルトはhttp://localhost/drm-web-clientです。

- d. 「SSLを使用」を選択すると、計算済URL "https://"が使用されます。それ以外の場合、"http://"が使用されます。
 - e. 「テストURL」リンクをクリックして、リンクが有効であることを確認します。
4. 「匿名プロファイル」タブで、次の手順を実行します:
 - a. 「プロファイルの追加」テキスト・ボックスに名前を入力します。
 - b. プラス記号(+)をクリックしてプロファイルのリストにプロファイルを追加します。
 - c. プロファイルのログイン資格証明を入力します。
 - d. 「プロファイルの保存」をクリックして新規プロファイルを検証し、メモリー内に保存します。
 - e. 「構成の保存」をクリックすると、Data Relationship Management構成にプロファイルを永続的に保存できます。



注:

このタブのすべてのプロファイルは、「ホスト・サーバー」タブのサーバーに保存されます。

匿名アクセスURLは、`http://DRM_Web_Server/drm-web-client/Logon.aspx?app=DRM_App_Name&login=Anonymous`という形式で作成されます。

たとえば、`http://localhost/drm-web-client/Logon.aspx?app=DRMApp1&login=AnonUser1`となります。

ホストされているヘルプの構成

Data Relationship Managementのオンライン・ヘルプ・コンテンツは、中央のOracleダウンロード場所から提供されます。これにより、Data Relationship Managementのダウンロードとインストールにかかる時間が短縮されます。

ユーザーにインターネット・アクセスがない場合、独自の環境でヘルプ機能をインストールおよび構成できます。インストール・プロセス中に「DRMドキュメント」コンポーネントを選択すると、Data Relationship Management Webサーバーにヘルプ機能がインストールされます。



注:

第508条に準拠したアクセシブルなヘルプが必要な場合は、ヘルプがローカルに実行されるようにインストールおよび構成を行う必要があります。

- ▶ ヘルプ機能がData Relationship Management Webサーバー上で実行されるように構成するには:
1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」、「**UI Webサーバー**」の順に選択します。
 2. 「ホストされているヘルプ」タブで、「ローカルにホストされているヘルプを使用」を選択します。
 3. 「ヘルプ・ベースURL」に、`http://Web_Server_Name/drm-web-client/documentation`としてURLを入力します。ここで、`Web_Server_Name`はホスト・マシンの名前です。



注:

ヘルプ・ベースURLは、ヘルプに内部的にアクセスできるWebサーバー上の仮想フォルダのルートを示します。ドキュメント・フォルダは手動で別のWebサーバーに転送できますが、正しいルートURLを示すようヘルプ・ベースURLを更新する必要があります。

4. リンクを確認するには、テストURLをクリックします。
5. コンソールへの変更を保存します。

CSSブリッジの構成

- ▶ CSSブリッジを構成するには:
1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」、「**CSS**」の順に選択します。
 2. 「一般」タブで、次のオプションを構成します。
 - **CSSブリッジの使用可能** - 選択するとCSSが有効になります。
 - **SSOの使用可能** - 選択するとシングル・サインオンが有効になります。



注:

SSOの詳細は、[41ページのData Relationship Managementでのシングル・サインオンの使用](#)を参照してください。認証設定の詳細は、[34ページの認証設定の構成](#)を参照してください。

- **CSSブリッジ・ホスト** - Data Relationship ManagementがShared Servicesと通信するために必要なData Relationship Management CSSブリッジ・コンポーネントを実行するShared Servicesコンピュータの名前を入力します。詳細は、[Data Relationship Management CSSブリッジ\(15ページ\)](#)および[セカンダリFoundation Servicesホストの構成\(22ページ\)](#)を参照してください。

適切に構成すると、drm-netjni-bridge-host.exeプロセスがCSSブリッジ・ホストで起動されます。構成の問題をトラブルシューティングするには、CSSブリッジ・ホストおよびData Relationship ManagementコンピュータのWindowsイベント・ログを参照してください。

- **JVMパス** - Java仮想マシン(jvm.dll)のパス。デフォルトの場所は、C:\Oracle\Middleware\jdk160_35\jre\bin\server\jvm.dllです。
- **Oracleインスタンス** - EPMインスタンスのパス。デフォルトの場所は、C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1です。



注:

「一般」および「クラス・パス」タブのすべての設定は、必ずしもData Relationship Managementアプリケーション・サーバーに相当しないCSSブリッジ・ホスト・コンピュータを基準とします。

3. 「クラス・パス」タブで、必要な.jarファイルへのパスを入力します。これらのパスは、ユーザーの環境に応じて変更する必要があります。クラス・パスの例は次のとおりです:

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\server\jar\awbutil.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\server\jar\cassecurity.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\server\jar\drm-epm-registry.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\common\jlib\11.1.2.0\epm_j2se.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3\server\lib\wlsqserver.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\modules\javax.servlet_1.0.0.0_2-5.jar
```

SMTPサーバーの構成

Data Relationship Governance機能では、電子メール通知を使用して、ガバナンス・ユーザーおよびデータ・マネージャに要求アクティビティを通知します。Data Relationship Governance通知が機能するようにSMTPサーバー設定を有効にして構成する必要があります。



注:

SMTPサーバーをローカルに設定するか、Data Relationship Managementアプリケーション・サーバーからリモートにアクセスできる必要があります。

▶ SMTPサーバーを構成するには:

1. 構成コンソールで、「ホスト・マシン」、「SMTPサーバー」の順に選択します。
2. 「SMTPの使用可能」を選択します。
3. SMTPサーバーのホスト名およびポート番号を指定します。
4. SMTPポート番号を指定します。
5. オプション: 「SSLを使用」を選択すると、計算済URL "https://"が使用されます。それ以外の場合、"http://"が使用されます。
6. オプション: 「SMTP認証が必要」を選択して、SMTPサーバーのユーザー名とパスワードを入力します。
7. 電子メールの送信元フィールドに表示される送信者名を入力します。
8. 送信者の電子メール・アドレスを入力します。

認証設定の構成

「認証設定」タブで、認証タイプの選択、内部認証ポリシーの変更およびユーザーのロックアウト・パラメータの設定を行うことができます。

▶ 認証設定を構成するには:

1. 構成コンソールで、「認証設定」を選択し、「設定のロード」をクリックしてData Relationship Managementシステム・プリファレンスに保存されている現在の設定を移入します。
2. 認証メソッドを選択します:
 - 内部 - Data Relationship Managementによって完全に管理されます。
 - CSS (Common Security Services) - Shared Servicesを使用して外部ユーザー・ディレクトリが集中的にサポートされます。
 - 混合 - 認証オプション(内部またはCSS)をユーザーが指定できます。
3. パスワード・プリファレンスを設定します:
 - 有効期間(日数) - ユーザーのパスワードが有効である日数。
 - 最大長 - ユーザー・パスワードの最大長であり、0 (ゼロ)は最大長がないことを示します。
 - 最小長 - ユーザー・パスワードの最小長であり、0 (ゼロ)は最小長がないことを示します。
 - 警告期間 - 正または負の数。実際にログインできなくなるパスワード有効期限日の何日前(-)または何日後(+)に、パスワードを変更しようユーザーに警告するかを指定します。
4. ユーザー・ロックアウト・プリファレンスを設定します:

- 非アクティブなしきい値 - 非アクティブなユーザーがロックアウトされるまでの最大日数。
 - 許可されたログインが無効です - ユーザーがロックアウトされるまでの無効なログイン試行の最大回数。
5. 「設定の保存」をクリックします。

EPMレジストリ設定の構成

Data Relationship Management構成設定をShared Services EPMレジストリに登録して、次のオプション機能を有効化する必要があります:

- EPM Architectとの統合
- EPM Mobileとの統合

Data Relationship ManagementアプリケーションおよびOracle Hyperion EPM Architectは、同じShared Servicesインスタンスに登録する必要があります。



注:

「登録解除」をクリックするとアプリケーションを登録解除できます。アプリケーションを登録解除するには、CSSブリッジが有効である必要があり、登録解除するアプリケーションが実行中である必要があります。

▶ Data Relationship Managementアプリケーションを登録するには:

1. Data Relationship ManagementアプリケーションのAPIアダプタおよびCSSブリッジが有効であることを確認し、認証設定を「CSS」または「混合」に設定します。

[APIアダプタ・ホストの構成\(30ページ\)](#)、[CSSブリッジの構成\(32ページ\)](#)および[認証設定の構成\(34ページ\)](#)を参照してください。

2. 構成コンソールで、「**EPMレジストリ**」を選択し、「アプリケーション」タブでこの情報を指定して「Data Relationship Management」Webサービスを指定します:

- HTTPまたはHTTPSプロトコル
- Webサービスのホスト・コンピュータ名
- ポート番号
- アプリケーション・コンテキスト - WebサービスのWebLogicアプリケーションの名前



注:

この情報は、URLに結合されます(たとえば、`http://servername:managedServerPort/oracle-epm-drm-webservices`など)

ここで、`http`はプロトコル、`servername`はWebサービスのホスト・コンピュータ名、`managedServerPort`はポート番号、`oracle-epm-drm-webservices`はWebサービスのWebLogicアプリケーションの名前です。

3. 統合のために使用するData Relationship Managementのユーザー・資格証明を指定します。
4. 「登録」をクリックします。

▶ EPM MobileのData Relationship Management Webアプリケーションを登録するには:

1. 次を実行していることを確認してください:

- oracle-epm-drm-rest-webservice.earファイルを管理対象サーバーにデプロイします。ほとんどの場合、WebアプリケーションをEPMServer0管理対象WebLogicサーバーにデプロイできます。
- Data Relationship ManagementアプリケーションのAPIアダプタおよびCSSブリッジを有効にして、認証設定を「CSS」または「混合」に設定します。

[APIアダプタ・ホストの構成\(30ページ\)](#)、[CSSブリッジの構成\(32ページ\)](#)および[認証設定の構成\(34ページ\)](#)を参照してください。

- EPMレジストリへのData Relationship Managementアプリケーションの登録
2. 構成コンソールで、「**EPM**レジストリ」、「**Web**アプリケーション」の順に選択します。
3. 次の情報を入力します:

- httpまたはhttpsプロトコルを選択します
- oracle-epm-drm-rest-webserviceをデプロイするREST Webサービス・アプリケーションのホスト・コンピュータ名およびポート番号を入力します。ほとんどの場合、サービスが管理対象サーバーEPMServer0にデプロイされます。この管理対象サーバーのポートを指定してください。



注:

論理アドレスを使用してEPMサーバーを構成した場合、構成中に使用したポート番号を指定します。

- ほとんどの場合、アプリケーション・コンテキストをデフォルトのoracle-epm-drm-rest-webserviceのままにできます。



注:

この情報はURLに結合されます。たとえば、`http://servername:logicalPortNumber/oracle-epm-drm-rest-webservices`です。`http`は選択されたプロトコル、`servername`はWebサービスのホスト・コンピュータ名、`logicalPortNumber`はEPMワークスペース・アプリケーションに構成されたポート番号、`oracle-epm-drm-rest-webservices`はWebサービスのWebLogicアプリケーションの名前です。

4. 「登録」をクリックします。

スケジュール済タスクの構成

タスクの実行者コンポーネントでは、Data Relationship Managementアプリケーション・サーバーのバックグラウンドで実行されるスケジュール済プロセスの実行を処理します。構成コンソールでは、スケジュール済タスクの設定を定義できます。

削除済バージョン・レコードのページ

削除されたバージョンのデータベース・レコードは、スケジュール済タスクとしてData Relationship Managementリポジトリから完全に削除されます。このプロセスにより、システムの使用率が低い期間に削除プロセスが実行されるため、その他のシステム操作のパフォーマンスに対する影響が小さくなります。管理者は、ページ・プロセスの頻度およびブラックアウトの設定を構成できます。

- ▶ 削除対象としてマークされたバージョンのすべてのバージョン関連レコードを完全に削除するには:
 1. 構成コンソールで、アプリケーションを選択し、「スケジュール済タスク」を選択します。
 2. 「設定のロード」をクリックして、Data Relationship Managementシステム・プリファレンスに保存されているとおり現在の設定を移入します。
 3. ページ頻度の数を入力し、時間、分、秒として時間の単位を選択します。
 4. オプション: スケジュールされたページを実行しない場合にブラックアウト期間を設定するには、ブラックアウトの開始時間を入力し、ブラックアウトを持続する期間(時間単位)を選択します。
 5. 「設定の保存」をクリックします。

アプリケーションの削除

不要になったアプリケーションは削除できます。

アプリケーションを削除するには、アプリケーションを右クリックして「削除」を選択します。

構成設定の保存およびアプリケーション・サーバーのサービスの起動

構成コンソールで行った変更を保存し、Data Relationship Managementサービスを再起動してそれらの変更を有効にする必要があります。



注:

構成コンソールはアプリケーション・サーバーで実行されます。

- ▶ 設定を保存し、アプリケーション・サーバーのData Relationship Managementサービスを起動するには:
 1. 構成コンソールで、「構成の保存」をクリックします。
 2. 「ローカル・サービス」メニューから、「開始」をクリックします。



注意

「Oracle DRMサーバー・プロセス」サービスがアプリケーション・サーバーで起動する前に、すべてのセカンダリ・サーバーで「Oracle DRMサーバー・プロセス」サービスが起動して実行中である必要があります。

WebブラウザでのData Relationship Managementの起動

- ▶ WebブラウザでData Relationship Managementを起動するには:

1. 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「Webクライアント」の順にクリックします。
2. リポジトリ・ウィザードのプロセス中に定義した管理ユーザーのIDとパスワードを使用するか、アップグレードされたリポジトリの既存のユーザーを使用してログインします。



注:

スクリプトから手動でリポジトリを作成した場合、パスワードは"Welcome!"になります。

Internet Explorerでの互換表示モードの無効化

Data Relationship Managementは、Microsoft Internet Explorerに用意されている互換表示モードをサポートしていません。

▶ この機能を無効にするには:

1. Internet Explorerで、「ツール」、「互換表示設定」の順に選択します。
2. 次のオプションが選択されていないことを確認します:
 - イン트라ネットサイトを互換表示で表示する
 - すべてのWebサイトを互換表示で表示する
3. 「閉じる」をクリックします。

移行ユーティリティの構成

次の表に、web.configファイルのappSettingsセクションにある移行ユーティリティの構成設定を示します。このファイルは、デフォルトでC:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\client\migration-clientディレクトリに格納されます。



注:

web.configファイルを変更した場合、IISでWebサイトを再起動して変更を有効にする必要があります。

表2 構成設定

キー	説明
configuredServers	admin-configured接続を指定します。 デフォルト値はnet.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManagerであり、localhostはコンピュータで、5210は構成済のプロセス・マネージャ・ポートです。
maximumExceptionsOnImport	エラー後も続行するオプションを選択した場合、ロード中に生成できる例外の最大数を指定します。

キー	説明
	0より大きい整数を指定します。デフォルト値は1000です。
showExceptionDetail	<p>詳細な例外情報をエラー・ページに表示するかどうかを指定します。</p> <p>注意</p> <p>詳細情報にはファイル・パスなどの機密情報が含まれる可能性があるため、詳細情報をすべて表示するとセキュリティ上のリスクが発生する場合があります。この設定は、デバッグまたはテスト目的でのみ有効化する必要があります。</p> <p>Trueを指定すると例外の詳細が有効になり、Falseを指定するとlog4net設定に応じて詳細が表示されます。デフォルト値はFalseです。</p>
enableAboutPage	<p>「バージョン情報」ページを有効にするかどうかを指定します。「バージョン情報」ページには移行ユーティリティおよびシステム・コンポーネントのバージョンが表示されますが、セキュリティを向上するためこのページはデフォルトで無効になっています。移行ユーティリティのバージョンを確認する場合、このページを有効にできます。</p> <p>ページを有効にしてそのアクセスを管理者に制限するには、/Forms/About.aspxファイルのDiscretionary Access Control List (DACL)を編集します。DACL、ディレクトリ・セキュリティおよび匿名アクセスの対話を通じてWebページへのアクセスを制御する方法の詳細は、IISのドキュメントを参照してください。</p> <p>Trueを指定すると「バージョン情報」ページが表示されます。デフォルト値はFalseです。</p>

詳細は、「[アップロード・ファイル・サイズの増加](#)」(39ページ)を参照してください。

アップロード・ファイル・サイズの増加

アップロード・ファイルのデフォルト制限は4MBです。デフォルト制限を20MBに変更するには、次の設定をweb.configファイルの<system.web>要素に追加します:

```
<httpRuntime maxRequestLength="20480" executionTimeout="3600" />
```



注:

デフォルトでは、web.configファイルはC:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\client\migration-clientに存在します。

Data Relationship Management Webアプリケーションのロード・バランシング

2つ以上のData Relationship Management Webアプリケーションにロード・バランシング・サポートを提供するようにOracle HTTP Serverを構成できます。Data Relationship Management WebクライアントをホストするIISサーバーに要求をリダイレクトするようにOracle HTTP Serverを設定します。この手順は、EPM SystemインストーラによってインストールされるOracle HTTP Serverが論理ホストであることが前提です。EPM Systemインストーラは、Oracle HTTP Serverに対して必要な前提条件チェックを実行します。詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。

▶ Data Relationship Management Webクライアントのロード・バランサとしてOracle HTTP Serverを設定するには:

1. IISを実行している2つ以上のコンピュータにData Relationship Management Webサーバー・コンポーネントをインストールします。
2. [23ページのData Relationship Managementアプリケーションの構成](#)に記載された手順を使用して、Data Relationship Managementアプリケーションおよびホスト・コンピュータを構成します。
3. 次の場所にあるOracle HTTP Serverのhttpd.confファイルを開きます:

```
MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/httpConfig/ohs/config/OHS/ohs_component/  
httpd.conf
```

4. 次のディレクティブが存在し、有効であることを確認します。存在しない場合はディレクティブを追加します。

```
LoadModule proxy_balancer_module "${ORACLE_HOME}/ohs/modules/mod_proxy_balancer.so"
```

```
LoadModule headers_module "${ORACLE_HOME}/ohs/modules/mod_headers.so"
```

5. Data Relationship Management Webサーバー・コンポーネントをホストするIISサーバーごとにBalanceMemberディレクティブを追加して、Data Relationship Management Webクライアントのプロキシ・バランサ定義を作成します。

```
#Configure members for cluster  
<Proxy balancer://iisdrm>  
  BalancerMember http://Machine1:80/drm-web-client route=server1  
  BalancerMember http://Machine2:80/drm-web-client route=server2  
</Proxy>
```

6. 次のディレクティブを追加して、固定ロード・バランシングを使用可能にします。これらのサンプル・ディレクティブでは、Oracle HTTP Serverに、前の手順で定義したプロキシ・バランサの固定ロード・バランシングのルートに登録するCookieを挿入するよう指示します。

```
Header add Set-Cookie "BALANCEID= iisdrm.%(BALANCER_WORKER_ROUTE)e;  
path=/drm-web-client;" env=BALANCER_ROUTE_CHANGED
```

7. 次のフォワードおよびリバース・プロキシ・ディレクティブを追加します。

```
#The actual ProxyPass  
ProxyPass /drm-web-client balancer://iisdrm stickysession=BALANCEID nofailover=Off  
  
#Do not forget ProxyPassReverse for redirects  
ProxyPassReverse /drm-web-client http://<drm_web_server1>:80/drm-web-client  
ProxyPassReverse /drm-web-client http://<drm_web_server2>:80/drm-web-client
```


8. `httpd.conf`ファイルを保存して、Oracle HTTP Serverインスタンス用のOracle Process Managerサーバーを再起動します。

構成後、Data Relationship Management Webアプリケーションには、`http://<ohs_server>:<port>/drm-web-client`というURLを使用してアクセスできます。

WebサーバーでのSSLの停止

Oracle HTTP Server (OHS)を使用して、クライアントのWebブラウザからIIS Data Relationship Management Webアプリケーションの`drm-web-client`とSSLで保護された通信を行うことができます。この構成では、クライアントのブラウザは、HTTPSプロトコルを通じてOHSと通信し、OHSはプロキシとして機能してHTTPを通じてData Relationship Management Webアプリケーションと通信します。*Oracle Enterprise Performance Management System*セキュリティ構成ガイドのWebサーバーでのSSLの停止に関する項を参照してください。

Data Relationship Managementでのシングル・サインオンの使用

Data Relationship Managementのシングル・サインオン(SSO)では、様々なコンポーネントをインストールして構成する必要があります。一般的なWeb SSO環境では、Webアイデンティティ管理ソリューションによって、1つ以上の独立したソフトウェア・システムの認証および権限付与を制御します。SSOの目的は、システムごとにログインのプロンプトを表示せずに、ユーザーが様々な独立したシステムにアクセスできるようにすることです。

Data Relationship Managementは、SSOを実装するために、Shared Services、Webアイデンティティ管理ソリューション(Oracle Access Managerなど)および外部ユーザー・ディレクトリ(Oracle Internet DirectoryまたはMicrosoft Active Directory)を利用します。

次の手順を使用してSSOをインストールおよび構成します。

タスク	参照先
1. 外部ユーザー・ディレクトリでShared Servicesを構成します。	<i>Oracle Enterprise Performance Management System</i> ユーザー・セキュリティ管理ガイドのOID、Active Directoryおよびその他のLDAPベースのユーザー・ディレクトリの構成に関する項を参照してください。
2. SSO用のShared Servicesを構成します。	<i>Oracle Enterprise Performance Management System</i> セキュリティ構成ガイドのSSO用のEPM Systemの構成に関する項を参照してください。
3. Data Relationship Managementをインストールします。	17ページのData Relationship Managementのインストール を参照してください。
4. Data Relationship Management構成コンソールで、CSS認証モード用にData Relationship Managementを構成してSSOを有効にします。	29ページのホスト・コンピュータの構成 を参照してください。
5. Data Relationship Management Webアプリケーションを保護し、Shared Servicesで構成された同じ外部ユーザー・ディレクトリを使用するようにWebアイデンティティ管理ソリューションを構成します。	42ページのWebアクセス管理 を参照してください。

詳細は、「[Webアクセス管理](#)」([42ページ](#))を参照してください。

Webアクセス管理

Data Relationship Management Webアプリケーション・リソースは、Webアプリケーションに対するすべての要求をOracle Access ManagerなどのWebアクセス管理アプリケーションにリダイレクトするように保護する必要があります。ユーザーが基本認証を使用してセキュリティ・エージェントに対して認証した後、エージェントは要求をData Relationship Management Webアプリケーションに転送し、そこでHTTPヘッダー情報が認証のためにData Relationship Managementサーバーに渡されます。

Oracle Access Manager

Oracle Access Manager (OAM)によって、Data Relationship Management Webアプリケーションに対する認証および権限付与が行われます。このドキュメントでは、OAMがインストールされており、Data Relationship Management Webアプリケーションに対するアクセス・ポリシーを使用して構成されていると仮定します。詳細は、OAMアクセス管理ガイドのアクセス・システムの構成およびリソースの保護に関する項を参照してください。

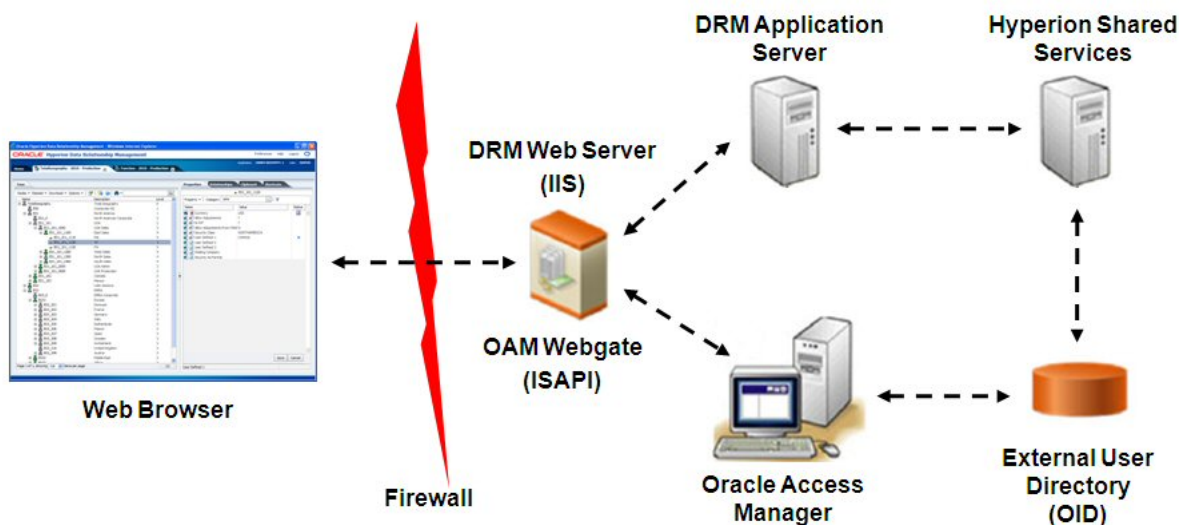
Data Relationship Managementは、次のいずれかのオプションを使用してOracle Access Managerとともに構成できます：

- Data Relationship Management WebサーバーにOracle Access Manager 10g Webgate for IISをインストールして構成
- Data Relationship Management Webサーバーがロード・バランシングされるようにOracle HTTP Serverを設定し、Oracle Access Manager 11g Webgate for OHSをインストール

WebGateモジュールは、Webサーバー上のWebコンテンツに対するHTTP要求を捕捉して、Oracle Access Managerに転送します。

Oracle Access Manager 10g Webgate for IISのダウンロードについては、Oracle Access Manager 10g – non OHS 11g Webgates and 3rd Party IntegrationsのReadmeファイル(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/101401-099957.html>)を参照してください。

次の図は、Data Relationship Management Webサーバー上の10g Webgate for IISを使用したOracle Access Managerでのプロセス・フローを示しています：



3

Data Relationship Management Web サービスAPIのデプロイおよび構成

この項の内容：

システム要件	43
デプロイメントの前提条件	44
Webサービス・アプリケーションのデプロイ	45
Data Relationship Management Webサービスの保護	45
Oracle Enterprise Managerを使用したData Relationship Management Webサービスのテスト	47
Webサービス・アプリケーションのロギングの構成	49
トラブルシューティング	49

Data Relationship Managementエンタープライズ・アーカイブ・アプリケーション(oracle-epm-drm-webservices.ear)には、Data Relationship Managementサーバーとの統合を可能にするWebサービス・モジュールが含まれています。アプリケーション・アーカイブには、SOAPプロトコルを使用してHTTP経由でアクセス可能なDrmServiceおよびDrmGovernanceService Webサービス・モジュールが用意されています。WebサービスはJavaで実装され、WebLogicアプリケーション・サーバーにデプロイされます。どちらのサービスも、Data Relationship Management APIアダプタ・サービスと内部的に通信します。

Webサービスでは、ユーザーは、WeblogicとShared Servicesの両方からアクセス可能な外部ユーザー・ディレクトリを使用して認証される必要があります。

Data Relationship Management WebサービスAPIをデプロイする前に、[11ページの図4](#)と [12ページの図5](#)を確認してください。

システム要件

- Oracle WebLogic Server 11g
- Data Relationship Management APIアダプタ
- Oracle Web Services Manager (OWSM)
- Shared Services
- Oracle Internet DirectoryやMicrosoft Active Directoryなどの外部ユーザー・ディレクトリ



注：

最新のシステム要件は、[Oracle Enterprise Performance Management Systemの動作保証マトリックス](#)を参照してください。

デプロイメントの前提条件

次の項では、Data Relationship Management WebサービスAPIをデプロイする場合の前提条件について説明します:

- [Foundation Servicesのインストールおよび構成\(44ページ\)](#)
- [Oracle Web Services Manager用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール\(44ページ\)](#)
- [Oracle Web Services Managerの構成\(44ページ\)](#)
- [外部プロバイダでのWebLogicの構成\(45ページ\)](#)
- [APIアダプタの構成\(45ページ\)](#)

Foundation Servicesのインストールおよび構成

HTTP基本認証およびData Relationship Management Webサービス・アプリケーションのWebサービス(WS)・セキュリティをサポートするには、Foundation Servicesをインストールし、Data Relationship Managementを構成して認証にShared Servicesを使用する必要があります。Oracle Web Services Manager (OWSM)はoracle-epm-drm-webserviceアプリケーションに必要ですが、oracle-epm-drg-rest-webserviceアプリケーションに必要ありません。Foundation ServicesをインストールするとOWSMがインストールされますが、まだ実行されていない場合に構成が必要になることがあります。Oracle Hyperion Foundation Servicesのインストールの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドを参照してください。

Oracle Web Services Manager用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール

Oracle Web Services Managerが機能するには、データベースが必要です。Oracle Web Services Manager用のメタデータ・サービス・スキーマをインストールする方法に関する要件および手順は、次のドキュメントを参照してください。

- [Oracle Enterprise Performance Management](#) インストールおよび構成ガイドのリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成に関する項
- [Oracle Fusion Middleware](#) システム要件および仕様のリポジトリ作成ユーティリティ(RCU)の要件に関する項



注:

Oracle Fusion Middlewareのドキュメントは、<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#middleware> で入手できます。

Oracle Web Services Managerの構成

Oracle Web Services Managerを構成するには、Oracle Fusion Middleware構成ウィザードを実行し、WebLogicドメインを構成します。次に、そのドメインで構成する製品を選択します。

Oracle Web Services Managerを構成するには、*Oracle Enterprise Performance Management System* デプロイメント・オプション・ガイドのOracle Web Services Managerの構成に関する項を参照してください。

外部プロバイダでのWebLogicの構成

WeblogicでデプロイされたData Relationship Management Webサービス・アプリケーションは、外部認証のユーザーのために、Shared Servicesで構成されたのと同じユーザー・ディレクトリにアクセスするよう構成する必要があります。

WebLogicを構成するには、*Oracle Enterprise Performance Management System* デプロイメント・オプション・ガイドのOID、MSAD、SunOneに対するWebLogicドメインの構成に関する項を参照してください。

APIアダプタの構成

APIアダプタは、Data Relationship Management構成コンソールを使用して構成する必要があります。Data Relationship Managementアプリケーションを構成する場合、「ホスト・マシン」タブでAPIアダプタ・ホストを設定します。詳細は、[29ページのホスト・コンピュータの構成](#)を参照してください。



注:

APIアダプタは、Webサービスとの内部通信で使用され、カスタムAPIプログラムで直接使用することはできません。

Webサービス・アプリケーションのデプロイ

Data Relationship Management Webサービス・アプリケーションoracle-epm-drm-webservices.earおよびoracle-epm-drm-rest-webservices.earを既存のWebLogicドメインおよび管理対象サーバーにデプロイする必要があります。たとえば、WebサービスをEPM Foundationサーバー内のEPMSystemドメインのEPMServer0管理対象サーバーにデプロイできます。両方の.earファイルは、アプリケーション・サーバー・マシンの%EPM_ORACLE_HOME%\products\DataRelationshipManagement\apiディレクトリにあります。

Webアプリケーションをインストールする手順は、『[Oracle Fusion Middleware Webサービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド](#)』のWebサービス・アプリケーションのデプロイに関する項を参照してください。



注:

Oracle Fusion Middlewareのドキュメントは、<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#middleware>で入手できます。

Data Relationship Management Webサービスの保護

Oracle Web Services Managerのセキュリティ・ポリシーを使用してDrmServiceおよびDrmGovernanceService Webサービスを保護することが重要です。使用状況に応じて異なるポリシーをアタッチできます。

Data Relationship Management Webサービスでは次のポリシーを使用できます:

目的	ポリシー
Oracle Hyperion EPM Architectとの統合	oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection (DrmServiceのみに適用されます)
E-Business Suite General Ledgerとの統合	oracle/wss_username_token_service_policy (DrmServiceのみに適用されます)
Oracle Fusion Accounting Hubとの統合	oracle/wss_saml_or_username_token_service_policy (DrmServiceのみに適用されます)
ワークフロー開発キット	oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection (DrmServiceのみに適用されます)
カスタムAPIプログラムまたは統合	次のいずれか(DRMServiceおよびDRMGovernanceServiceに適用されます): <ul style="list-style-type: none">• oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection• oracle/wss_username_token_service_policy• oracle/wss_saml_or_username_token_service_policy• oracle/wss_http_token_service_policy

詳細は、次を参照してください:

- [Oracle Web Services Managerでのポリシーの構成\(46ページ\)](#)
- [SSL用のData Relationship Management APIアダプタの構成\(46ページ\)](#)

『Oracle Fusion Middleware Webサービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』のWebサービスへのポリシーの添付に関する項を参照してください。

Oracle Web Services Managerでのポリシーの構成

Oracle Web Services ManagerでDrmServiceおよびDrmGovernanceServiceモジュールのポリシーを構成するには、『Oracle Fusion Middleware Webサービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』のポリシーの構成に関する項を参照してください。

メッセージ保護を使用するWebサービス・セキュリティ・ポリシーを構成する場合、キーストアを暗号化に使用するように構成する必要があります。キーストアを構成するには、『Oracle Enterprise Performance Management Systemデプロイメント・オプション・ガイド』のメッセージ保護用のキーストアの設定に関する項を参照してください。

SSL用のData Relationship Management APIアダプタの構成(オプション)

Data Relationship Management Webサービスでは、APIアダプタを使用してData Relationship Managementサーバーと通信します。

- ▶ SSL用のData Relationship Management APIアダプタを構成するには:
 1. SSL証明書をインストールしてAPIアダプタ・ポートをその証明書にマップします。



注:

Data Relationship Management APIアダプタでは、Windows Communication Foundation (WCF)を使用します。WCFおよび証明書の使用の詳細は、<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms731899%28v=VS.90%29.aspx>を参照してください。

- a. SSL証明書を取得します。本番環境では、信頼できる認証局ベンダーから証明書を取得する必要があります。テスト環境では、Windows MakeCertユーティリティを使用して自己署名証明書を生成できます。
- b. MMCスナップインを使用して、信頼できるルート認証局ストアに証明書をインポートします。
- c. 証明書から拇印値を取得します。
- d. SSL証明書を使用してAPIアダプタ(WCF)ポートを構成します。手順については、<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms733791%28v=VS.90%29.aspx>を参照してください。



注:

APIアダプタのデフォルト・ポートは5240です。

2. HTTPS / SSL用のAPIアダプタを構成します。SSLを有効化するには、Data Relationship Management構成コンソールの「APIアダプタ・ホスト」タブで、証明書名を入力します。
3. テストを行ってHTTPS/SSLが動作していることを確認します。
 - a. 前述の変更が完了したら、Data Relationship Managementサービスを再起動します。これは、Data Relationship Management構成コンソールから実行できます。
 - b. Webブラウザから、`https://drm host name:5240/Oracle/Drm/ APIAdapter?wsdl`というURLを使用してData Relationship Management APIアダプタのWSDLにアクセスします(`drm host name`は、Data Relationship Managementサーバーが実行されているコンピュータの名前です)。



注:

プロトコルはhttpではなくhttpsです。httpプロトコルは、HTTPS/SSLが無効の場合にwsdlにアクセスするために使用できます。

Oracle Enterprise Managerを使用したData Relationship Management Webサービスのテスト

▶ Oracle Enterprise Managerを使用してWebサービスをテストするには:

1. Data Relationship Management WebサービスにOracle Web Services Managerセキュリティ・ポリシーが添付されていることを確認します。ローカルまたはグローバル・ポリシーを添付できます。

例: `oracle/wss_username_token_service_policy`



注:

Data Relationship Management Webサービスに同時に添付できるポリシーは、1つのみです。



注:

セキュリティ・ポリシーを変更したら、状況によりData Relationship Management WebサービスがデプロイされているWebLogicターゲット・サーバーを再起動する必要があります。

- Enterprise Managerで、Data Relationship Management Webサービスのデプロイ先のドメインを選択して、ドメイン・コンテキスト・メニューまたは右ペインの「WebLogicドメイン」メニューから「Webサービス」/「Webサービスのテスト」を選択します。
- 「WSDL」テキスト・ボックスにData Relationship Management WebサービスのWSDLを入力します。

例: `http://localhost:28080/oracle-epm-drm-webservices/DrmService?wsdl`

- 「操作」から、getSysPrefsなどの操作を選択します。
- 「リクエスト」タブで、「WSSユーザー名トークン」を選択し、認証で使用するユーザー名とパスワードを入力します。



注:

ユーザーは、WebLogicドメインのセキュリティ・レルム内およびShared Services内に存在する必要があります。

- 「引数の入力」を展開し、ドロップダウン・リストから「XML表示」を選択して、"`<soap:Body xmlns:ns1="http://drm.webservices.epm.oracle">`"タグの前に(フォーマットされたとおりに正確に)次のSOAPヘッダー引数を貼り付けます:



注:

次の引数をコピーする場合、タグや要素間に改行または空白を挿入しないでください。

```
<soap:Header>
<AppParameters xmlns="http://drm.webservices.epm.oracle">
<serverUrl xmlns="http://drm.webservices.epm.oracle">http://localhost:5240/Oracle/
Drm/APIAdapter</serverUrl>
<sessionParams xmlns="http://
drm.webservices.epm.oracle">ProductVersion=11.1.2,CultureName=en-
US,UICultureName=en-US, TimeZoneID=Eastern Standard Time</sessionParams>
</AppParameters>
</soap:Header>
```



注:

選択したData Relationship Management操作の必須パラメータを移入する必要があり、そうしないとエラーが発生します。

- 手順6のSOAPヘッダー引数で、serverUrlを、Data Relationship Management APIアダプタの適切なホスト名およびポートに変更します。
- 「Webサービスのテスト」をクリックします。



注:

成功すると、「レスポンス」タブにWebサービスからの応答が表示されます。失敗すると、エラー・メッセージが表示されます。

9. テストの完了後、必要な本番ポリシーを再添付します。

Webサービス・アプリケーションのロギングの構成

オプションで、Oracle Diagnostics Logging (ODL)を構成して特定のロギング・レベルを1つ以上のロガー名に対して固有のログ・ファイルに記録できます。ロギングを構成するには、Weblogic Scripting Tool (WLST)を使用してData Relationship Management Webサービスに固有のロガー名を構成できます。

- oracle.epm.drg
- oracle.epm.drm
- oracle.epm.webservices.drm
- oracle.epm.webservices.drg

Oracle Fusion Middleware WebLogic Scripting Tool コマンド・リファレンスの[setLogLevel](#)および[configureLogHandler](#)コマンドを参照してください。

トラブルシューティング

エラー	考えられる原因	推奨事項
要求におけるOracle EPM Foundationエージェント・エラー: セッションの開始(メッセージ: セッションを開始できません。EPMCSS-00301: ユーザーの認証に失敗しました。資格証明が無効です。有効な資格証明を入力してください)。	Shared Servicesにユーザー・アイデンティティが含まれません。	Data Relationship Managementが ³ 、WebLogicレلمムで使用されているものと同じユーザー・ディレクトリで構成されていることを確認します。
javax.xml.ws.soap.SOAPFaultException: FailedAuthentication : セキュリティ・トークンを認証できません。	ユーザー・アイデンティティがWebLogicセキュリティ・レلمムに存在しません。	レلمムの適切な認証プロバイダでWebLogicレلمムを構成します。Shared Servicesの構成で使用したものと同じプロバイダを指し示すように構成されていることを確認します。
javax.xml.ws.WebServiceException: 次の場所でWSDLへのアクセスに失敗しました: http://localhost:7001/oracle-epm-drm-webservices/DrmService?WSDL。	ホストまたはポートが間違っています。 WebサービスがWebLogicドメインで実行されていません。	Data Relationship Management Webサービスがデプロイされ、WebLogicドメインで実行されていることを確認します。 WSDL URLのホストまたはポート参照を変更します。
次の場所におけるDRM APIアダプタとの通信試行中のエラー: http://localhost:5240/Oracle/Drum/APIAdapter/。	ホストまたはポートが間違っています。 APIアダプタが実行されていないか、適切に構成されていません。	APIアダプタが構成され、実行されていることを確認します。 クライアント・プログラムまたはアプリケーションのAPIアダプタURLを正しい値に変更します。

エラー	考えられる原因	推奨事項
<p>javax.xml.ws.soap.SOAPFaultException: SOAPでエラーを認識する必要があります: {http://docs.oasis-open.org/wss/2004/01/oasis-200401-wss-wssecurity-secext-1.0.xsd}Security, {http://docs.oasis-open.org/wss/2004/01/oasis-200401-wss-wssecurity-secext-1.0.xsd}Security.</p>	<p>OWSMポリシーがData Relationship Management Webサービスに添付されていないか、ポリシーが存在する場合はポリシーが無効です。</p> <p>OWSMが適切に構成されておらず、動作していません。サブレットにアクセス可能で、Policy Managerのステータスが動作中であることを確認します。</p> <p><code>http://<host>:<port>/wsm-pm/validator</code></p>	<p>グローバルまたはローカル・ポリシーをData Relationship Management Webサービスに添付します。</p> <p>次のOWSMのトラブルシューティングに関する項の手順に従ってください。</p> <p>http://download.oracle.com/docs/cd/E12839_01/web.1111/b32511/ diagnosing.htm#CHDIDCHA</p>

4

Data Relationship Management インストールのアップグレード

この項の内容：

アーキテクチャの比較	51
サポートされるアップグレード・パス	52
アップグレード・チェックリスト	53
既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード	54
アプリケーションへの更新の適用	63
手動アップグレード・タスク	64

アップグレードは、新しいソフトウェア・リリースをデプロイし、以前のデプロイメントから新しいデプロイメントにアプリケーションおよびデータを移動するプロセスです。

11.1.2より前のData Relationship Managementリリースからアップグレードする際に、データにどのような影響があるかをよく理解するために、[データ分析\(58ページ\)](#)および[データ変換\(60ページ\)](#)のセクションを確認することが重要です。

アーキテクチャの比較

Data Relationship Managementのこのリリースは、単一のマシンに最適化された効率的なアプリケーション・サーバー・アーキテクチャ、64ビット・ハードウェアのマルチプロセッサ・デプロイメントを提供します。各アプリケーションは、以前のリリースで使用された複数のエンジンおよびサーバー構成ではなく単一のエンジンおよびサーバーを使用します。これらの改善により、読取り操作の同時実行性が向上し、エンジン間のイベント・トラフィックがなくなり、リポジトリから転送されたデータへの接続が削減されます。

表3 アーキテクチャの比較

リリース11.1.2.3	リリース11.1.2.4
アプリケーションの起動により、プロセス・マネージャ、イベント・マネージャおよび複数のエンジンがロードされます	アプリケーションの起動により、単一のエンジンがロードされます
各エンジン(RW, SRO, RV, LRO)のデータベースからバージョンをロードします	データベースから一度のみバージョンをロードします
各エンジンは、複数のスレッドを処理する単一のプロセッサを使用します。向上した同時実行性とプロセッサの利用のために使用される複数のエンジン。	読取り操作の高い同時実行性。使用可能な場合の複数のプロセッサの完全な使用。
長い読取り操作は、キューに待機する変更によってブロックされる場合があります。	すべての読取り操作は非ブロッキングです。

リリース11.1.2.3	リリース11.1.2.4
長い読取り操作は、起動するLROエンジンまたはロードするバージョンあるいはその両方を待機する必要がある場合があります	長い読取り操作はすぐに実行されます。

サポートされるアップグレード・パス

次のリリースから、このリリースのData Relationship Managementにアップグレードできます:

- 9.2.x
- 9.3.x
- 11.1.x



注:

リリース11.1.2からアップグレードする場合、このリリースを以前のリリースに対してインストールしてください。11.1.2より前のリリースからアップグレードする場合、最初に古いリリースを手動でアンインストールしてから新しいリリースをインストールする必要があります。

Data Relationship Management構成コンソールのリポジトリ・ウィザードによって、以前のリリースからData Relationship Managementリポジトリをアップグレードするための様々なオプションが提供されます。

後続の項では、リポジトリをアップグレードまたはコピーする場合の高度なオプションについて説明します:

- [9.2.x、9.3.xおよび11.1.1.xのリポジトリ・アップグレード・パス\(52ページ\)](#)
- [11.1.2.xのリポジトリ・アップグレード・パス\(52ページ\)](#)

詳細な手順は、[54ページの既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード](#)を参照してください。

9.2.x、9.3.xおよび11.1.1.xのリポジトリ・アップグレード・パス

- アップグレード・パスのオプション1: 「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。
- アップグレード・パスのオプション2:
 1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成SQLスクリプトを手動で実行します。
 2. ターゲット接続として手順1で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。

11.1.2.xのリポジトリ・アップグレード・パス

- アップグレード・パスのオプション1:

1. 新しいアプリケーションを追加して、既存の11.1.2.xリポジトリのリポジトリ接続情報を指定します。
 2. アプリケーションに対して「更新の適用」を実行します。
- アップグレード・パスのオプション2: 「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。
 - アップグレード・パスのオプション3:
 1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成SQLスクリプトを手動で実行します。
 2. ターゲット接続として手順1で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。

アップグレード・チェックリスト

次の表に、Data Relationship Managementをアップグレードするために実行するタスクの概要を示します。

表4 アップグレード・チェックリスト

タスク	参照先
<p>1. このリリースの互換性、システム要件、およびその他の前提条件を確認します。データベース環境がアップグレードを必要とする場合、次に進む前にデータベースのアップグレードを実行します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。</p> <p>注:</p> <p>Shared Servicesを使用する場合、Data Relationship Managementをアップグレードする前にOracle Hyperion Shared Servicesインストールをアップグレードする必要があります。詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 7ページのインストールの前提条件 • Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemの動作保証マトリックス(http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html) • 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストール概要』
2. 以前のリリースをバックアップします。	アップグレードを続ける前に、データベース、アプリケーションおよびその他のファイルを含む前のリリースの情報を必ずバックアップしてください。アップグレード前にdrm-config.xmlファイルをバックアップします。このファイルには、以前のリリースとの下位互換性はありません。
3. インストール・ファイルをダウンロードし、準備します。	このリリースのファイルをダウンロードしてZIPファイルの内容を抽出します。
4. Data Relationship Managementサービスを停止します。	以前のリリースのインストールと同じマシンにこのリリースをインストールする場合、Data Relationship Managementサービスを停止します。
5. 以前のリリースのData Relationship Managementをアンインストールします。	リリース11.1.2からアップグレードする場合、以前のリリースをアンインストールする必要はありません。以前のリリースに対してこのリリースをインストールしてください。

タスク	参照先
	11.1.2より前のリリースからアップグレードする場合、最初に古いリリースを手動でアンインストールしてから新しいリリースをインストールする必要があります。
6. このリリースのData Relationship Managementをインストールします。	17ページのData Relationship Managementのインストール
7. Data Relationship Managementを構成します。	Data Relationship Management構成コンソールを使用して新しいインストールを構成します。 54ページの既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード を参照してください。
8. このData Relationship Managementリリースに対してWebサービスを再デプロイします。 注: 11.1.2.1より前のリリースからWebサービスをアップグレードする場合、WebLogicコンソールを使用してWebサービスのDrmWebServiceをデプロイ解除する必要があります。 Webサービスをデプロイ解除する方法の詳細は、『Oracle Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』を参照してください。	WebLogicのWebサービス・アプリケーションの名前は、デフォルトでoracle-epm-drm-webservicesになります。
9. オプション: Webサービスをデプロイおよび構成します。	Data Relationship Management WebサービスAPIのデプロイおよび構成(43ページ)
10. Data Relationship Managementサービスを開始します。	

既存のData Relationship Managementアプリケーションのアップグレード

既存のすべてのアプリケーションのリポジトリ情報を更新する必要があります。以前のData Relationship Managementリリースからアプリケーションをアップグレードしたり、現在のリリースからアプリケーションをコピーできます。



注:

次の手順は、一般的なアップグレード・パスを示しています。アップグレードには複数のパスが存在するため、次の手順のすべてを適用できないアップグレード・パスもあります。

リリース固有のアップグレードの詳細は、[52ページの9.2.x, 9.3.xおよび11.1.1.xのリポジトリ・アップグレード・パス](#)および[52ページの11.1.2.xのリポジトリ・アップグレード・パス](#)を参照してください。

詳細は、次を参照してください:

- [データ分析\(58ページ\)](#)
- [外部接続の使用\(59ページ\)](#)
- [データ変換\(60ページ\)](#)

▶ 既存のData Relationship Managementアプリケーションをアップグレードするには:

1. 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。
2. アップグレードするアプリケーションを選択するか、アップグレードする新規アプリケーションを追加します。



注:

Data Relationship Managementサービスを開始する前に、既存のすべてのアプリケーションに関するリポジトリ情報を更新する必要があります。

3. 「リポジトリ構成」タブで、「リポジトリ・ウィザード」をクリックします。
4. 次のオプションを選択して「次」をクリックします:
 - 新規リポジトリの作成
 - 既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード
5. 「ソース接続」ページで、次の手順を実行します。
 - a. データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
 - b. ソース・リポジトリへの接続を入力します。これは、データのコピー元のデータベースです。このデータベースでは何も変更されません。
 - c. このデータベースからの読取りが可能なユーザーのユーザーIDおよびパスワードを入力します。
 - d. オプション:「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は15秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラーを生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は900秒です。



注意

タイムアウトを発生させないようにするには、「コマンドのタイムアウト」をゼロに設定します。

- e. 「接続のテスト」をクリックします。
6. 「次」をクリックします。
 7. 「ターゲット接続」ページで、次の手順を実行します。
 - データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
 - アップグレードされたリポジトリが存在するターゲット・データベースへの接続を入力します。
 - データベース・スキーマおよびデータ・ファイルを作成する権限を持つ管理者のユーザーIDおよびパスワードを入力します。
 - オプション:「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は60秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラーを生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は900秒です。



注:

タイムアウト値をゼロに設定すると、タイムアウトは使用されません。これらの設定は`drm-config.xml`に保存され、エンジンによって起動時に使用されます。大規模操作(大規模なバージョンの削除など)を実行するには、「コマンドのタイムアウト」をデフォルトより大きい値に設定します。



注意

タイムアウトを発生させないようにするには、「コマンドのタイムアウト」をゼロに設定します。

- 「接続のテスト」をクリックします。
8. 「次」をクリックします。
 9. 「リポジトリの分析」画面で、次の設定を確認して変更します。
 - バージョン - アップグレードするバージョンを選択し、アップグレードに含めないバージョンを選択解除します。
 - エクスポート - アップグレードするエクスポートのファイル接続、データベース接続および組込み接続を設定します。画面の最上部ですべてのエクスポートを変更するか、個々のエクスポートを変更します。
 - ブック - アップグレードするブックの前ファイル接続、後ファイル接続および結合ファイル接続を設定します。画面の最上部ですべてのブックを変更するか、個々のブックを変更します。
 - インポート - アップグレードするインポートのインポート・ファイル接続を設定します。画面の最上部ですべてのインポートを変更するか、個々のインポートを変更します。
 - 無効なプロパティ参照 - これらのプロパティ参照は、無効であり、アップグレード後に予期しない動作が発生する可能性があります。



注:

これらのオブジェクトとアップグレード中のデータ変換の動作方法の詳細は、[58ページのデータ分析](#)および[60ページのデータ変換](#)を参照してください。

10. 「次」をクリックします。
11. 次のいずれかの操作を行います:
 - Oracle Databaseの場合、次の手順に進んでください。
 - SQL Serverデータベースの場合、[27ページのSQL Serverデータベースの作成](#)に進んでください。
12. 「リポジトリ・ユーザーとデータ・ファイル設定」ページで、Data Relationship Managementリポジトリのスキーマ所有者として作成するユーザーIDおよびパスワードを入力します。
13. デフォルト・テーブルスペース設定を受け入れるか、変更を加えて「次」をクリックします。リポジトリのデフォルト・サイズの詳細は、[58ページのデータ分析](#)を参照してください。



注:

データ、インデックス、トランザクションおよびプロパティには専用のテーブルスペースを使用することを強くお勧めします。デフォルト・テーブルスペースの名前は、すでに使用中である可能性があり、新しいテーブルスペースの名前を指定しない場合は再利用されます。

14. 「アプリケーション管理者の作成」ページで、管理者ユーザーのパスワードを入力して「次」をクリックします。



注:

デフォルト管理者ユーザーはADMINですが、デフォルト管理者ユーザーを変更することもできます。



注意

11.1.2.xアプリケーションをアップグレードする場合、既存のADMINユーザーのパスワードはここで入力したパスワードによって上書きされません。

15. 「リポジトリ確認の作成」ページで、設定を確認して「次」をクリックし、作成プロセスを開始します。

データベースが作成されると、成功メッセージが表示されます。

16. 「次」をクリックします。

17. 「リポジトリ確認のコピー」ページで、設定を確認して「次」をクリックし、コピー・プロセスを開始します。

データベースがコピーされると、成功メッセージが表示されます。

18. 「次」をクリックします。



ヒント:

リポジトリの作成、コピーおよびアップグレードの情報は、リポジトリ・ウィザードのログに書き込まれます。ウィザードの「リポジトリの操作の完了」ページの「ログの保存」をクリックし、ログ・ファイルを保存します。

19. 「リポジトリの操作の完了」画面で、「終了」をクリックします。

設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。

20. 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

追加のアプリケーション構成タスクについては、次を参照してください:

- [ホスト・コンピュータの構成\(29ページ\)](#)
- [認証設定の構成\(34ページ\)](#)
- [構成設定の保存およびサービスの開始\(37ページ\)](#)

データ分析

「リポジトリの分析」ページには、新しいリポジトリのサイズとオブジェクトに影響する決定を行うことができるように、ソース・リポジトリの情報が含まれます。「分析の要約」セクションには、分析の概要が含まれます。スペース要件は、異なるセグメントに分割され、ユーザーが新しいリポジトリのスペース要件を理解しやすいように概要が示されます。ここに示されるサイズは、計算されたスペース要件がOracleリポジトリの各デフォルト・テーブルスペースで200MBを超える場合、またはSQL Serverリポジトリのデータおよびログ・ファイルで5MBを超える場合、リポジトリ・ユーザーおよびデータ・ファイルの設定ページに自動的に適用されます。「オブジェクト分析」セクションには、アップグレードを処理する前に対応する必要がある未解決の問題が表示されます。

- **バージョン** - バージョンが表示され、アップグレードに含めないバージョンを選択解除できます。バージョンを選択解除すると、「要約」セクションのスペース値とカウント値に影響します。
- **エクスポート** - 特別な注意が必要なエクスポートが表示されます。結果や他の外部ファイルの外部接続が必要なエクスポートは、ここに含まれます。カスタム・エクスポートなど、サポートされなくなったエクスポートもここに含まれます。外部接続が提供されていない場合、エクスポートはクライアント・ファイル・エクスポートとして構成されます。外部接続の詳細は、[59ページの外部接続の使用](#)を参照してください。
- **ブック** - 結合ファイル、前ファイルおよび後ファイルの外部接続が必要なブックが表示されます。外部接続が提供されていない場合、エクスポートは結合ファイルを使用せずに構成されます。外部接続の詳細は、[59ページの外部接続の使用](#)を参照してください。
- **インポート** - 入力ファイルの外部接続が必要なインポートが表示されます。外部接続が指定されていない場合、インポートはクライアント入力ファイルを使用して構成されます。外部接続の詳細は、[59ページの外部接続の使用](#)を参照してください。
- **無効なプロパティ参照** - Data Relationship Managementシステムで予期しない動作を発生させる可能性のあるプロパティ参照が表示されます。これらの無効な参照は、通常、Data Relationship Managementデータベースを直接更新することによってのみ発生します。次のシナリオがここに含まれます。

次の2つのシナリオでは、リポジトリの分析中にプロパティ定義にフラグが設定され、参照されなくなったデータ値は破棄されたとみなされます。11.1.1.xソースをアップグレードする場合、破棄されたレコードは新しいリポジトリにコピーされません。11.1.2.xソースをアップグレードすると、破棄されたレコードは新しいリポジトリにコピーされますが、WebクライアントUIには表示されず、Data Relationship Managementサービスの開始時にアプリケーション・サーバーのWindowsイベント・ビューア・アプリケーションのログに警告が表示されます。

- Property_LocalまたはRM_Node_Prop_Local表のローカル・プロパティとして参照されているグローバル・プロパティ。
- Property_GlobalまたはRM_Node_Prop_Global表のグローバル・プロパティとして参照されているローカル・プロパティ。

たとえば、11.1.1.x Property_Local表のレコードは、現在グローバルとして設定されているプロパティ定義ではコピーされません。同様に、11.1.1.x Property_Global表のレコードは、現在ローカルとして設定されているプロパティ定義ではコピーされません。

次のシナリオでは、リポジトリの分析中に、ユーザーのみに警告するようにプロパティ定義にフラグが設定されます。プロパティ定義は、ソース・データベースに存在しますが、有効性を確認する必要があるため、アップグレードされたデータベースにコピーされません。

- ローカル・プロパティを参照する派生パラメータを含む派生グローバル・プロパティ
- 次の式メソッドのいずれかでローカル・プロパティを参照する式を含むグローバル式プロパティ:

- IsRangeListSubset
 - NodePropValue
 - OrigPropValue
 - ParentPropValue
 - PropControllingHier
 - PropMaxValue
 - PropMinValue
 - PropValue
 - RangeListContains
 - ReplacePropValue
 - Stuff
- 参照プロパティとしてローカル・プロパティを指し示すグローバル参照プロパティ


外部接続の使用

外部接続は、サーバー・ファイルの場所、FTPの場所およびデータベース表にアクセスするために使用されます。デフォルト接続を作成および適用可能で、個別に接続を適用できます。ファイル接続は、作成後、ファイル接続を必要とする任意のオブジェクトから参照できます。たとえば、エクスポートの接続を作成すると、その接続はインポート・セッションでも使用できます。複数選択して適用することも、すべて選択して適用することもできます。



詳細は、次を参照してください:

- [外部接続の作成\(59ページ\)](#)
- [外部接続の適用\(60ページ\)](#)


外部接続の作成


分析の特定の行で、または「ファイル接続」フィールドの分析画面の最上部で、外部接続を作成できます。どちらの場所でも、をクリックして接続の作成ダイアログ・ボックスを開きます。行レベルで外部接続を作成すると、接続は自動的に行に適用されます。

▶ サーバー・ファイルへの外部接続を作成するには:


1. 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
2. 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。
3. 「接続タイプ」で、「サーバー・ファイル」を選択します。
4. サーバー・ファイルへのUNCパスを入力します。をクリックしてサーバー接続をテストします。
5. 「OK」をクリックします。

▶ FTPファイルへの外部接続を作成するには:

1. 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
2. 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。

3. 「接続タイプ」で、「FTP」を選択します。
4. ホスト・サーバーを入力します。をクリックしてサーバー接続をテストします。
5. サーバーの有効なユーザーIDおよびパスワードを入力します。
6. 「OK」をクリックします。


▶ データベース表への外部接続を作成するには:


1. 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
2. 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。
3. データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
4. データベース・サーバーへの接続文字列を入力します。
5. サーバーのユーザーIDおよびパスワードを入力します。



注:



をクリックすると、データベースへの接続をテストできます。

6. をクリックしてデータベース表をロードします。
7. 外部接続のためのデータベース表を選択します。
8. 「OK」をクリックします。


外部接続の適用



注:

行レベルで外部接続を作成すると、接続は自動的に行に適用されます。詳細は、[59ページの外部接続の作成](#)を参照してください。

▶ オブジェクトに外部接続を適用するには:

1. 「ファイル接続」フィールドで、をクリックし、適用する外部接続を選択します。
2. 外部接続を適用する行を選択します。



注:

[Shift] + クリックおよび**[Alt]** + クリックを使用して、複数の行を選択できます。選択した外部接続をすべての行に適用するには、「すべて選択」をクリックします。

データ変換

次の項では、アップグレードの中にデータを変換する方法について説明します:

- [ユーザー\(61ページ\)](#)

- トランザクション(61ページ)
- エクスポート(62ページ)
- インポート(63ページ)
- 外部接続(63ページ)
- プロパティ(63ページ)

ユーザー

ADMINユーザーに割り当てられた役割は、すべてのロールに再設定されます。また、パスワード有効期限日は、現在の日付にシステム・プリファレンスで設定された期間を加えた日付に再設定されます。



注意

11.1.2.xアプリケーションをアップグレードする場合、既存のADMINユーザーのパスワードはここで入力したパスワードによって上書きされません。

Data Relationship Managementのアップグレード・プロセスでは、次のユーザー・タイプ・マッピングを使用します:

古いユーザー・タイプ	割り当てられた機能役割
システム	アクセス・マネージャ アプリケーション管理者 データ・マネージャ ワークフロー・ユーザー
機能	データ・マネージャ ワークフロー・ユーザー
セキュリティ	アクセス・マネージャ
ユーザー	インタラクティブ・ユーザー ワークフロー・ユーザー

トランザクション

- Data Relationship Managementのユーザー・インタフェースには、ユーザーのセッションに応じたローカル時間およびフォーマットで日付と時刻が表示されます。11.1.2より前のリリースのタイムスタンプ値を変換する場合、次のルールが適用されます。
 - タイムスタンプは、Data Relationship Management構成コンソールが実行されているタイムゾーンのオフセットを使用してUTCに変換されます。11.1.2より前のリリースのソース・データが書き込まれたタイムゾーンとは異なるタイムゾーンでコンソールが実行されている場合、変換後の日時は前後に1時間以上ずれる可能性があります。
 - 11.1.2より前のリリースでは、夏時間が一貫して適用されていたわけではないため、すべてのトランザクション日付は、Data Relationship Management構成コンソールが実行されているタイムゾーンによって指定される適切なオフセットを使用して変換されます。日付がコンソールのタイムゾーンの標準期間に含まれる場合、標準の

UTCオフセットが適用されます。日付がコンソールのタイムゾーンの夏時間に含まれる場合、夏時間のUTCオフセットが適用されます。たとえば、東部タイムゾーンでは、標準のUTCオフセットは-5時間ですが、夏時間中はオフセットが-4時間になります。リポジトリのアップグレード後に追加されたすべての新規データについても、格納日付は標準および夏時間の適切なUTCオフセットを反映しています。

- ソース・リポジトリの削除されたバージョンのトランザクション・レコードは、ターゲット・リポジトリにコピーされないため、コピーされたトランザクション履歴レコードの数は、ターゲットRM_Transaction表の行数に一致しない可能性があります。
- バージョンを選択解除すると、それらのバージョンに属するトランザクションはコピーされません。

「エクスポート実行」トランザクション・タイプでは、プロパティの略称フィールドではなく「オブジェクト名」フィールドにエクスポート名が格納されます。

Data Relationship Managementのアップグレード・プロセスでは、次のトランザクション名マッピングを使用します:

古いトランザクション名	新しいトランザクション名
オートメーター実行	アクション・スクリプト実行
抽出の移行	エクスポートの移行
ロードの移行	インポートの移行
システム・カテゴリの追加	管理者の階層グループの追加
システム・カテゴリの更新	管理者の階層グループの更新
システム・カテゴリの削除	管理者の階層グループの削除

エクスポート

次の項では、エクスポートのアップグレード方法について説明します:

プレビューのエクスポート

プレビューの出力モードが含まれるエクスポートは、クライアント・ファイル・ターゲット・デバイスに直接移行されます。

データベースのエクスポート

データベースのエクスポートを使用するには、新しい外部接続を作成するために、更新されたデータベース接続情報が必要です。データベースのエクスポートごとに接続情報を指定して、新しい外部接続を簡単に作成できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、エクスポートのデータベース・パラメータ情報は保持および移行されますが、出力モードはエクスポートが機能するように「クライアント・ファイル」に設定されます。システムが起動して実行中になったら、新しい接続を作成し、エクスポートを構成してそれらを使用できます。

ファイルのエクスポート

このリリースより前のシステムにおけるファイルの場所は、クライアントのコンテキストで構成されます。新しいシステムはWebアプリケーションであるため、エクスポートでは、サーバーのコンテキストに基づいてファイルを生成する必

要があります。ファイル出力モードでのエクスポートの場合、アップグレード・プロセスによってファイルの場所の情報が提供され、UNCパスにマップされる新しい外部接続を簡単に使用できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、ファイル名は保持および移行されますが、エクスポートの出力モードは「クライアント・ファイル」に設定されます。アップグレード・プロセスの後に、適切な外部接続を作成し、エクスポートを構成してそれを使用できます。

祖先のエクスポート

祖先のエクスポートは、適切な設定を持つ世代のエクスポートに変換され、元の祖先のエクスポートと同等の結果が返されます。

エクスポート・ブック

ファイル情報を含むエクスポート・ブックは、ファイルのエクスポートとほぼ同じように扱われます。アップグレード・プロセス中に、ブックの結合ファイル、前ファイルおよび後ファイルで使用する外部接続を作成できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、ブックはクライアント・ファイルに出力するように設定されます。

インポート

このリリースより前のシステムでは、ユーザーは、インポート・ファイルの場所およびログ・ファイルの場所をクライアント・アプリケーションのコンテキストで保存できました。このリリースでは、外部接続を使用してサーバーのコンテキストでファイルの場所を保存するか、実行時にローカル・ファイルを選択できるようにインポートを保存できます。アップグレード・プロセス中に、新しい外部接続を作成するために使用される接続情報を指定できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、インポートでは、実行時にローカル・インポート・ファイルを選択する必要があります。ログ・ファイルは、ファイルに保存されなくなりました。インポートの結果は、ページに表示され、必要に応じて結果をダウンロードできます。

外部接続

分析ページで追加された外部接続は、新しいデータベースに挿入され、それらが選択されているメタデータ・オブジェクトによって参照されます。

プロパティ

Data Relationship Management 11.1.2.1リリースでは、プロパティ定義のネームスペースが導入されました。11.1.2.1より前のアプリケーションのアップグレード・プロセスは、適切なネームスペース接頭辞(ユーザー定義プロパティの場合はCustom、システム定義プロパティの場合はCore)を使用するように、明示的なプロパティ名の参照を使用して派生プロパティ式を自動的に変換します。

アプリケーションへの更新の適用

- ▶ 既存の11.1.2.xリポジトリに更新を適用するには:

1. 新規アプリケーションが作成されます。
2. 「リポジトリ構成」タブで、既存の11.1.2.xリポジトリ用のリポジトリ接続情報を指定します。
3. 「アプリケーション」リストからアプリケーションを選択します。
4. 「アプリケーション」メニューから、「更新の適用」を選択します。



注:

「更新の適用」オプションは、11.1.2.0.xより前のリリースには使用できません。

手動アップグレード・タスク

派生プロパティ参照によるプロパティのアップグレード

実行時に他のプロパティの値に基づいて計算されたプロパティ名を参照する11.1.2.1より前のアプリケーションの派生プロパティ式の場合、式を手動で編集し、Concat関数を使用してネームスペース接頭辞(CustomまたはCore)を挿入する必要があります。参照されるプロパティ名はノードの式の評価中にのみ計算されるため、アプリケーションのアップグレード・プロセスでは、このような性質の派生プロパティを識別または自動変換できません。

たとえば、アップグレードの前に、MyPropNameプロパティから返されるプロパティの値を取得する次の式です:

```
PropValue(PropValue(MyPropName))
```

アップグレードの後に、明示的なプロパティ参照はCustom.MyPropNameに更新されます:

```
PropValue(PropValue(Custom.MyPropName))
```

ただし、実行時にCustom.MyPropNameプロパティから返される値も、特定のネームスペースで識別される必要があります。外部PropValue関数で正しく評価するためには、式を手動で編集して適切なネームスペースを連結する必要があります:

```
PropValue(Concat(Custom., PropValue(Custom.MyPropName)))
```

バッチ・クライアント・スクリプトのアップグレード

適切な動作を実現するには、次の変更を行って、11.1.2より前のリリースのバッチ・クライアント・スクリプトを手動でアップグレードする必要があります。

- バッチ・クライアント・プログラム名をdrm-batch-client.exeに変更します。
- URLをData Relationship Managementアプリケーションに変更します(構成コンソールの「ホスト・マシン」タブにあるプロセス・マネージャのURLを参照)。

バッチ・クライアントのパラメータの詳細は、*Oracle Data Relationship Managementユーザー・ガイド*を参照してください。

APIプログラムのアップグレード

11.1.2.1 WebサービスAPIを使用するAPIプログラムは、このリリースのWebサービスAPIと連携するように手動でアップグレードできます。手動でアップグレードするには、プロキシ・クラスを再生成し、プロジェクトを再構築して、以前使用していたメソッドおよびタイプの変更によって発生する可能性のあるビルド・エラーを解決する必要があります。本番リリース間のAPI変更のリストと、Webサービスのプロキシ・クラスを再生成する手順の詳細は、*Oracle Data Relationship Management APIガイド*の11.1.2.1 APIプログラムのアップグレードに関する項を参照してください。

11.1.2より前のData Relationship Managementリリースと組み合わせて使用するAPIプログラムは、このリリースで提供されているWebサービスAPIを使用するように手動で変更する必要があります。WebサービスAPIに加えられた機能拡張の詳細は、*Oracle Data Relationship Management新機能*を参照してください。WebサービスAPIの使用方法の詳細は、*Oracle Data Relationship Management APIガイド*を参照してください。このリリースのWebサービスAPIで使用可能な操作に11.1.2より前のAPI操作をマップする方法の詳細は、*Oracle Data Relationship Management APIガイド*の11.1.2より前のAPIプログラムのアップグレードに関する項を参照してください。

5

Data Relationship Management アプリケーションのモニタリング

Data Relationship Managementアプリケーションは、構成コンソールを使用してモニターできます。

アプリケーション・ステータスおよびマシン情報が次のタブにあります：

- **実行中のプロセス** - マシン名、各プロセスの名前とポート番号、プロセスの開始時間、およびプロセスのメモリとCPUの使用状況を参照できます。
- **ロードされたバージョン** - 各バージョンの名前、マシン名および各バージョンのエンジンを参照できます。
- **現在のセッション** - アプリケーションにログインしたユーザーの名前に加え、ログイン時間および最終活動時間を参照できます。

マシンのステータス情報は、次のタブに存在します：

- **マシン情報** - マシン名、オペレーティング・システム、バージョン、マシンが実行を開始した時刻、およびData Relationship Management Windowsアカウントを参照できます。
- **実行中のプロセス** - 各プロセスの名前とポート番号、プロセスの開始時間、およびプロセスのメモリとCPUの使用状況を参照できます。
- **Windowsイベント・ログ** - 警告などの最近のイベント、イベントのソースおよびイベント・メッセージを参照できます。

▶ アプリケーションおよびマシンのモニタリング情報を表示するには：

1. Oracle Data Relationship Management構成コンソールを起動するには、「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。
2. 次のいずれかの操作を行います：
 - アプリケーションのモニタリング情報を表示するには、アプリケーションを選択して「アプリケーション・ステータス」をクリックします。前述のタブを使用してアプリケーションの情報を表示します。
 - マシンのモニタリング情報を表示するには、アプリケーションを展開してコンピュータ名を選択します。前述のタブを使用してアプリケーションの情報を表示します。

